
メイの冒険

青海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メイの冒険

【Nコード】

N9776D

【作者名】

青海

【あらすじ】

-メイが目を覚ました時、たくさんの小人に囲まれていた。突然迷い込んでしまった異世界で、お前は「精霊の愛し子」だと言われる。出会いと絆。小さな少女が周りに助けられながら精一杯の知恵と勇気で冒険するファンタジー冒険小説。現在はドワーフの森で修行中。

第一話 初めの第一歩

「きゃー!」

長いまつげに縁取られた鳶色の大きな目の幼い少女は目を覚ましたとたん大声をあげた。

「パパア！ママア！なんか知らない人が、いっぱい……？」

少女が驚くのは無理もない。両親を探すように周りを見回してみると彼女が眠っていたベッドを取り囲むように10人ほどの白雪姫に出てくるような小人達を取り囲んでいたのだ。

「ええ？な、なに？こ、小人さん？それも10人？それじゃ3人多すぎるよお……小人さんは7人じゃないと」

少女はまだ寝起きなので、混乱していた。

よくわからないがこの小人さんたちは恐ろしい顔などしていない。ちよつと不安はまだあるがとりあえず、朝起きたときの習慣で無意識のうちに手になじんだ感触を探して手を伸ばした。彼女はすぐに探していたものを見つけて抱きしめた。三つの誕生日にもらってからずつと一緒にいるクマのテディ。

「いつ！いたあい……ママア……どこにいるのぉ」

急に動いたからか全身がひどく痛んだ。なんだ、この痛み？どうして知らない間に怪我をしているのだろう……骨でも折ったのだろうか。少女は不思議に思ったがあまりの痛みに涙がにじんで、手に持っていたテディをぎゅっと抱きしめ母親を目で探した。

『@% %#』

明らかに母親ではないと少女にはわかっていたが、女の人の声が聞こえて振りむくと、一番小柄でスカートをはいた小人さんが動いちやだめよ、とでも言うように少し眉間にしわを寄せながら、さつと手を差し伸べてその小さな少女がベッドに落ち着くのを手伝ってくれた。なんとなく、声が出なくて頭を下げると彼女の眉間のしわが少し和らいだ。

『%\$**\$##%?』

不意に少し渋い低い声が聞こえて少女は見てみると、中でもめがねを掛けた小人が少女のほうを見ていた。少女は思わず息をつめた。めがねの奥に聡明そうな光をたたえた目で何かを確認するように彼女を見やり、その後一言周りの仲間達になにかを言った。そうすると、今少女を手伝ってくれた女の人を除くほかの小人達はしぶしぶといった様子で後ろに下がった。とはいっても小さな同じ部屋の中で、興味と不信が半分半分といったような面持ちでまだじつとこの小さな女の子のことを観察するように見ていたのだけれど。それでもすぐ間近に迫られていないだけで少し圧迫感も和らいで少女は思わずほーっと息を吐いた。どうやらそのめがねの小人が少女が怯えてると思ったのか、少し離れているとでも言ってくれたようだ。

少女はとりあえず、ベッドの周りを取り囲まれていた状況からは解放されて、やっと周りを見回す余裕が出来た。少女は今まで寝ぼけててつきり自分の部屋のベッドに寝てるものだと思ってたのだが、実はぜんぜん覚えがない部屋にいることにやっと気づいた。そのことに不安になって両親を探すが周りにはこの10人の小人たちしかないようだ。少女の家は東京の郊外にある現代的な二階建

ての家である。ログハウスと言えば聞こえはいいが、丸太を切り出して組み立てたようなこの家とはまったく違う。

ベッドから見える窓の外には森が、遠くには高い山が見える。どこか観光地の別荘にいるのだろうか。というか、なぜこの小人さんたちと一緒にいるのかがまずわからない。……まさかこの小柄な彼らは誘拐犯なのか？背は小人と違っていいほど小柄で、昨日6歳になったとはいえ、同年代の他の子達と比べ少し成長が遅めのこの少女より頭ひとつ分ほどしか高くないようだ。しかし、体つきは少女の腰よりも太い上腕をもちこの小さな少女など簡単に運べるほどの力持ちに見える。とはいえ、めがねの男の人や先ほど支えてくれた女の人がいるように悪い人たちには思えない。

少女にはは自分がなぜここにいるのかまったくわかっていなかった。昨日の夜はきちんと自分の部屋のベッドで寝たはず……、と考えて、そういえば昨日は6歳のお誕生日のお祝いに家族みんなで食事に出かけて、あまりの楽しさにはしゃぎすぎてその後車の中でうとうとしてしまったな、と思い出した。いつおうちに帰ったのかも覚えていない。

「あれ？わたし家に帰ってないのかな？」

なにかがおかしい。なぜ覚えてないのだろう。それにしても、体中に感じるこの痛み、ひどい怪我ではないみたいだけど、あちこち動かすのが痛い。骨折はしてなくてもひびでも入ったらと思うと余計に両親が恋しくなった。でもこんな怪我をいつした……？

自分の両親はいつたどこなのかひどく、嫌な予感がしてそれ以上考えたくないような気がした。

『@#\$\$%%\$』

そのまま少女が物思いに沈んでいると、また何かめがねをかけた小人が言ったが、今度はどうやら芽衣に話しかけていたようだ。少女は何を言われているのか言葉はまったく意味はわからなかったが、その小人が辛抱強く少女の返事を待っているような気がして弱ってしまった。

「あの、なんていつてるかわかりません……」

その小人は少女が声を発すると少し驚いたように目を見開いた。

「あの、それよりも私のパパとママを知りませんか？ここがどこだかわかりませんが、すごく心配してると思います。あ、あの……？」

少女は何とか伝えようと身振り手振りで話しかけたがわかってもらえた様子にはなかった。眼鏡の小人は後ろを振り返って何事かを他の仲間達に話した後、それから少し考えるような顔をして、自分の胸をたたき、

「ゼノン」

とはっきりゆっくり言った。その後、少女の方を指差し首をかしげる動作をした。

「ぜ、ゼノン？」

少女は意味もわからずそのまま繰り返したがその小人がうれしそうに首を何度も縦に振りながら自分の胸をたたいているのを見て、はっと気が付いた。

「ゼノン」

少女は今度はゼノンを指差しながらそういった。そしてその後自分の胸をたたいて

「芽衣」

というと、伺うように小人を見た。

小人のゼノンは良くできました、というようにうなずいて、少女芽衣を指差し、

「メイ」

といった。芽衣もうれしくなっただ度もうなずいた。

そうだが、言葉がわからないならまず何とかこの小人さんたちとお話ができるようにならないとどうしようもない。

両親と初めて離れ離れになったことに不安で一杯だったが、今は出来ることをするしかない。

その後、その10人の小人たちにそれぞれ名前を言ってもらい、芽衣はやつと微笑んだ。

第二話 言葉のレッスン

ゼノン は人間の成人した男性より随分背の低い小人達の中でも更に小柄で、芽衣よりも手のひらひとつ分ほどしか大きくなかった。どちらかといえば物静かな学者のような雰囲気と好奇心のいっぱい楽しそうな目が印象的だけど、白雪姫に出てきそうなふわふわの長いひげを生やしていた。歳はいくつ位なのかはメイには判断できなかった。長いひげはお話とは違って白くはなく、木の幹のような茶色をしていた。あの初めてあったときに一緒にいた十人の中では小柄なほうではあったが、とはいえ、頑丈そうながつしりとした手足をしていて、腕の太さは芽衣の腰周りほどもあった。

芽衣がゼノンと初めて言葉をかわしてから、女の人 テーノという名前でゼノンの奥さんであることがわかった をのぞくほかのドワーフたちは芽衣の事は彼に任すことに決めたようで、ほとんど見かけることはなかった。

芽衣は自分が寝かされているのがどうやらゼノンのおうちらしいことがわかった。少しからだが良くなってからクマのディを連れて外からおうちを眺めて見ると、その家は森の中でも奥の方にあり、小さな赤い屋根の可愛い丸太のおうちだった。

「かわいいー！見て！ディ！素敵だね！」

芽衣はママに寝る前に読んでもらった白雪姫の絵本の挿絵のような世界にすっかり感激した。

こんな可愛いおうちに住めるなんてとっても素敵。でも、パパとママ、いったいどこに行っちゃったんだろう…。きっと私のこと

探してるに違いないよね。

芽衣は両親のことを思い出して涙ぐみそうになるのをぐっとこらえた。

ないたつて仕方ないよ。この小人さんたちは芽衣にとっても親切にしてくれている。まだ言葉がうまく通じないので、いまいちどという状況だったかはわからないけど、怪我をしていた私のこと、助けてくれたみたいだし。

芽衣はもうこの小人達が自分の事を誘拐したのかもとは考えていなかった。

芽衣のことをまるで自分の子供のように熱心に世話をしてくれるゼノンたち夫妻の様子を見てもそんなはずがないことはわかっていた。

それにしても、芽衣にとってありがたいことにゼノンは驚くほど辛抱強くとても優秀な先生だった。その上に芽衣もまた熱心な生徒だったことがこの語学学習にとってもいい影響をした。

芽衣にとっては両親に会えるための近道はこの言葉を習って何とか両親のことを聞きたいという強い願望があったからだだった。

芽衣は初めて親元を離れて今まで自分が生活していた中で当たり前にあつたものがないことが初めはとても不便に思えた。普段使っていた自分専用のノートパソコンがあればいいが、そんなものは持ち歩いていなかった。もしあつたとしても、充電ができないのであまり役には立たなかっただろう。そんなことを考えていて、そういえば気が付いた。

芽衣はデディのおなかの部分のチャックを開けて中から小さな鉛筆とノートを出した。

お気に入りのデディはいくつか隠しポケットが付いていて、背中に

背負うリュックにもなる。

芽衣はその晩、何とか覚えた大事な単語を忘れないようつたない手つきで幼稚園で覚えたひらがなで書いた。ノートはまだまだページはあったけど、他に代わりになるものがないので、無駄にしないよう普段は外で何度もむき出しの土の上に棒で書くことで工夫してみた。

ゼノンはある日芽衣が（ゼノンの目から見れば）いとも簡単に文字らしきものを地面に書いているのを見て内心ひどく驚いていた。ゼノンにとっては人間のまだ幼い少女が当たり前のように文字を書いているのが信じがたかった。なので、その丸みを帯びた文字は初め文字だと気付かず、ただの落書きかと思い込んでいたのだ。

ドワーフ族の中でもっとも知識が深い自分ならまだしも人間族でこのように文字が書けるものは身分の高いものか、魔法使い達くらいではないか。ましてやおそらく生まれて5、6年ほどの子供がこれほどいともたやすく文字を操るとは…。いったいこの子はどこから迷い込んできたのだろう。

ゼノンはこの奇妙な子供を見ながら、メイに初めてあったときのことを思いだしていた。

初めに倒れたこの子を森で見たときはあまり仲の良くないエルフ族の者かとおもい、そのまま通り過ぎようとしたのだがなにかが引っかかって近くまで行ってみると、なんと人間族の子供のようだった。

からだはわれら誇り高きドワーフ族とは似てもに付かず貧相で、弱弱しく、こんな体でよくもこの森のこんな奥までやって来て生き

てこれたものだというのが初めの感想だった。

それが、自分の家につれて帰り、怪我の手当てをテーノに任せて森のほかのドワーフ族の長老連中にそのことを報告すると、やつらは近くでその子を見てみたいといい、ついてきた。

自分もその子というか、トレードでくる商人たちを除いて中原の方まで出ないと見るのがほとんどない人間族に興味があったので反対もせず家に招き入れたが、メイが起きたとたん、叫び声をあげてそのあどけない顔をあげたとき初めてこの子が背の高さは大人のドワーフとそう変わらないとはいえ、人間族としてはおそらくまだ幼い小さな子供だということに思い至った。

そのことが、不思議とこの弱弱しい小さな人間の子供を何とかしてあげたいという庇護欲のようなものを覚えさせたのだろう。小さな頃から独立心が強く、すぐにひとり立ちする子供を持つドワーフ族としては珍しく、ゼノンとテーノはこの小さな子を守ってあげようと決めた。

芽衣はまだ気付いていなかったが、ゼノンに拾われたことは芽衣にとって本当に幸運だった。

ゼノンにとって驚くことにこの子供には中原でも使われる共通語が通じなかった。いつもトレーディングに来ている人間族とはまったく無理なく会話ができるのに、これはどういうことだろうか？人間族でも僻地に住むものはまた違う言語を使うのだろうか？

ゼノンは興味がでて詳しく聞きたかったが肝心の言葉が通じないのでは仕方がない。まずは名前からと自分で名乗り、なんとか彼女の名前がメイであることがわかりほっとした。長老連中はすでにこの言葉もわからない子供に興味をなくしたようで私にこの子のことは一任することだった。

少しずつだ。これから少しずつ言葉を教えてあげよう。親元に返すにしてもここから人間族が住む中原までは険しい道だ。言葉を教

えると同時に、森でも生活ができる程度に鍛えてあげないと、このままでは一冬を越すことも難しいだろう。

いや、まだ今は春だ。まだ時間はある。ゆっくりと教えてあげよう。

ゼノンとテーノは自分達の子供達が巣立ってから久方ぶりに暖かい家庭が帰ってきたような気がしてうれしくなった。

芽衣の怪我也含めた衣食住の世話をずっとしてくれていた、ゼノンの奥さんのテーノとのやり取りは芽衣の語学力を気付かないうちにさらに向上させた。テーノは今年小学校にあがる予定の芽衣よりほんの少ししか大きくなかったがそれでもドワーフらしく力が強くてきばきと芽衣の面倒を見てくれていた。

芽衣は初め、この無口だと思っていた女の人が少し怖かったが、まだ言葉もあまりわからず、両親が恋しくてデディを抱きしめながらこっそり泣いていたところをテーノは気付いて、デディごとそつと抱きしめて眠ってくれてからテーノのことが大好きになっていた。両親と離れ離れの幼い少女はゼノンとテーノに両親の面影をぼんやりと求めていたのかもしれない。

いつもお礼を言いたかったが良くわからなかったが初めてありがとうをゼノンに教えてもらった夜、テーノに使うとテーノは少し涙ぐみながら抱きしめてくれた。

「通じた！」

それが一番のご褒美となり、芽衣は言葉を覚えることが楽しくな

った。

言葉を学ぶとき、実際の生活の中で間違いをおかしながら、新しい言葉を当てはめて使っていく、周りの人に大げさに褒めてもらうことが一番の近道であり、赤ん坊が覚えていくのと同じやり方だ。その上、芽衣は赤ん坊ではないので、文法や、新しい単語の理解も早く、どんどんと言葉をマスターしていった。

芽衣はほどなく、ドワーフ族との交流をするのに問題ない程度まで言葉が話せるようになっていった。

第三話 二つのお月様と勇氣

芽衣はテーノが整えてくれた自分のために用意された部屋で夕飯までの間一人で物思いにふけていた。

芽衣はいつも忙しい両親を煩わせないようにいつも、自分の事は自分でやろうとするまだ6歳の子供にしては少し大人びた考え方ができる少女だったので、少し心が落ち着いてから、冷静に自分の状況を分析しようとしていたのだ。

思い出せるのは普段は忙しく食事もあり一緒にできない両親がふたりとも一緒に誕生日を祝ってくれたことだった。芽衣の父親は大きな商社の営業マンで、仕事がいとも忙しくて帰宅は早くても芽衣がもうお風呂に入って眠る前がほとんどだった。母親は元モデルの有名なデザイナーで、洋服をデザインしながらその服を扱う店も経営していてパパよりは早く帰ってくるとはいえ、夕飯と一緒に食べることは月に数度程度だった。

普段ならお手伝いの真鍋さんと一緒に作ったお夕飯を一人でテレビを見ながら食べるのだけど、誕生日は特別に二人が早く帰ってきてレストランに連れて行ってくれた。

大好きなフルーツがいっぱい乗ったケーキを三人で仲良く分けて食べたけど、それがすっごく美味しくてもっと食べたいなって顔をしていたんだと思う。

余った分はまた明日食べていいってが言ってくれたのがすごくうれしくて明日が楽しみだった。

プレゼントには二人からはきれいな青い丸い珠が付いたネックレスをもらってそれがなんだかお姉さんになったみたいですごくうれしかったのを思い出した。

いつものように胸元を探るとネックレスはママにつけてもらったまま首元にあった。

パパ、ママ。

レストランから出たその後は普通なら両親が、テディを抱きしめたまま車で寝てしまった芽衣をそのまま寝室まで運んでくれたことだろうけど、なぜか目が覚めた場所は小人達のおうちだったので、どこではぐれてしまったのかまったくわからない。

いったいどうやってここに迷い込んだんだろう……。

気が付いたときに着ていたのは、お気に入りのピンクのドレス。ピーターラビットのような可愛いウサギの絵柄とアルファベットで「メイ」が白くパターンになって入っているものだった。これは普段は子供服はデザインしない母親が誕生日にあわせて珍しくデザインして特別に作ってくれた物だった。つまり、パジャマを着てなかったたので、おそらく家に帰る前だったのではないかと思うけど、それはいまいちはずきりしない。

小人さんたちが私のことを誘拐したなんて思えない。小人さんたちは私のことを初め警戒してるみたいな雰囲気もあつたけど、ゼノンさんにしてもテーノさんにしても、本当に親切にしてくれてる。むしろゼノンさんの方が芽衣がどっからやってきたんだ？みたいな感じだよ。

まさか、これ全部夢の中のお話ってことはないよね？

だって、芽衣の体はやっぱり傷ついていて、痛みがあるし。

考えたくないけど、眠っている間に交通事故にでもあつて、芽衣一人だけ車から衝撃で放り出されたのかな？

それなら体中のこの怪我や痛みの理由も説明できるけど……。

それならパパとママはもしかしたら大怪我してるかも！

ううん、きっと大丈夫なはず。私は何でか一人ぼっただけで、それでもこうやって不思議な小人さんたちに助けてもらったもん。パパやママだってきっと大丈夫なはずだよ。

今こうやってぐずぐず悩んでも仕方ない。どうやったって、両親のことを知ることはすぐにはできそうもないのだから。

早くパパとママを探したいのに……。

いまだにうまく聞きたいことが聞けず、すごく歯がゆい。

それにしても、もし想像してみるみたいに自分が車から放り出されたんだとして、うちの近所には小人達が住んでる森なんてないよね？というか、それなら、ここはどこなの？

大人びた考え方ができるといっても、芽衣はまだ6歳になったばかりで、彼女の常識の中に「小人達が住む森など地球上に確認されている場所はない」、などというものはなかった。

どちらかというとお話が好きで夢見がちな芽衣にしてみれば御伽噺に出てくる小人さん達は日本には住んでなくても外国ならいるのかもしれないというくらいにしか考えていなかった。

「どうやって外国に来ちゃったんだろう……」

芽衣が初めて地球じゃない場所に自分がいるのだと気付いたのはそれから数日たった月の明るい夜にふと窓から外を見上げて大きな丸い月が二つ見えたときだった。

いくら夢見がちな芽衣でも地球にはお月様はたった一つしかないのは知っていた。そして眠れない夜にパパと一緒に見上げたお月様にはウサギさんがお餅つきをしていたはず。

ここからはどちらの月にもウサギさんは見えなかった。

「外国どこるか、違う世界に来ちゃったんだ……。」

芽衣は体が充分に良くなったら、小人さんたちに手伝ってもらって、なんとか日本のお家に帰ろうと思っていたのに、それが思っ

いたよりもおそろくずつと大変だろうことに初めて気付いた。

どうしたらいいんだろう。

思わず見上げた夜空には地球から見える月とは違う二つの月が輝いていた。

お月様は世界が違っててもやっぱりきれいで、芽衣を優しく励ましてくれているような気がした。

ふと胸元が光ったようなったようなきがして見るとペンダントの青い珠が月の明かりに反射してきれいに輝いていた。

なんだかこの青い珠、地球みたい。

お月様は自分では光らないけど、太陽の光が反射して輝いてるんだよ、とっていたパパの声が聞こえた気がした。

パパは子供の頃は宇宙飛行士になりたかったらしくて宇宙の話が大好きだった。パパも生まれるより前に地球から月に行った宇宙飛行士は月に降り立って地球を振り返って地球から月を見るように太陽で反射して輝く青い美しい地球を見たんだよね。パパがうれしそうに宇宙の話をするのを聞くのが大好きだった。パパ、私が地球とは違う惑星(？)から二つのお月様を見上げたなんて話したらきつとすつごく羨ましがるだろうな！

芽衣は少しだけ父親を思い出して涙が出てきたけど、ほんの少し元氣が出てきたようだ。

小人さんたちは芽衣の世界のことを知ってるかしら？でも、それを聞くにはまだまだ言葉をうまく話せるようにならないと…。小人さんたちが何を言ってるのか、まだよくわからないから。もっと言葉を勉強して、何とか帰る為に必要な情報を集めないと。

芽衣は寂しいことには慣れていた。だからなんとかその寂しさに蓋をすると平気なふりをした。

ちょうどそのときテーノが夕飯ができたのでテーブルに着くようにいったので、元気に返事をする、テーノの元に出来上がった食事を並べるために向かった。

芽衣はここでの食事が好きだった。テーノが料理上手なのもあるが、ゼノンとテーノと三人で囲む夕飯は、あのお誕生日に両親と食事をした楽しさを思い出させてくれる。

みんなで食べると、ご飯はいつもより、もっとおいしい。

『テーノ、これ、いっぱいなの、おいしい。』

第四話 テーノ

『テーノ、お手伝い、する』

メイは一生懸命覚えた単語を使って話しかけて来た。

『そうかい？うれしいね。それじゃ、私が洗ったぶんを拭いていつてくれるかい？』

テーノはあつという間に言葉を覚えていくこの人間の子供に随分と感心していたが、そのことには触れず、手伝ってくれるというその気持ちがいれしくて微笑んだ。

テーノとゼノンには3人の頑健な息子達がいたが、どの子ももう家を出てそれぞれ長男は鉱山で、次男は森で、そして一番下の息子も今はまだ見習いだが細工師として立派に働いていたし、家にいた頃にしても腕自慢のけんかばかりで母親を手伝うなどめったになかった。

可愛い我が子達にはかわりなかったが、こうして手伝ってくれるメイがまた違って可愛らしく、なんだか娘ができたみたいでうれしかった。

メイはゼノンによるとおそらく生まれてからそれほど経っていないらしく、独り立ちにはまだまだ遠い年齢のようだ。人間は独り立ちするほどの年齢に達するまでの成長はドワーフ族よりもゆっくりと聞いているので、おそらく年齢的にはまだ幼児といえる5、6才程度なのだろう。それにしてもそんな小さなうちに親元を離れることはひとり立ちの早いドワーフ族でもないことなので、おそらく親とはぐれてしまったのだろうこの子が不憫だった。

そうは言っても、背の高さはテーノと大してかわりなく、小さな子供だというのがなんだか不思議な感じがした。

確かに、顔立ちも時々トレーディングに来る人間族の男達と比べて愛らしく幼いのだが、身近に見ることのほとんどない大型の種族の子供というのは頭でわかっていても初めはやはり不思議な感じがした。

いまはテーノの服を少しつめて着せているが、初めに着ていた服もドワーフ族とはまったく違ったものだった。

ドワーフ族の一般的な着物は獣の皮を加工したものが主で、ほかには毛の長い獣から取れた毛糸を粗く織り込んだ物のみだ。

最近はトレーディングでやってくる人間族の作る植物から取れた繊維の衣も出回ってはいるがさすがに高価でテーノはまだ一枚も持っていないかった。いや、特にほしかったわけではないが。

一体どの植物からとった繊維を織ったのかよくわからない薄い布はその織りは見たこともないほど見事に細かく一定に整っており、はじめてみる鮮やかな薄い紅色に染まった布に不思議な文字と動物らしい絵柄が描かれており、おそらく一流の技術を使ったものではないかとテーノは思っていた。

いつも来る人間族の商人どもが持ってきた布よりも更に素晴らしき織りのそれはそれならばいったいいくらにするのだらう？
布だけではない。縫製にしても、一定の間隔で細かく細い糸で縫われたそれもまた恐ろしく均一でいままでに見たことがないものだった。

首もとを飾る、ドワーフ族である自分に見てもない不思議な青い珠の首飾りも小さな子供が持つには不釣り合いなほどほとん

ど完全な球体をしており、またその珠をつなぐ細かな鎖の技術も驚くほど高く、精巧でこれは目玉が出るほど高価であることが予想される。

不思議な動物の形の使い古されてはいるが柔らかな大きなぬいぐるみは、ドワーフにはぬいぐるみや人形を持つ習慣はないので良くわからないが、これもまた毛皮ではない特殊な材料を使った柔らかな素材が、子供の持ち物として普通では考えられない。

そうだとすると、この人間の子供は驚くほど裕福な家庭の子供なのだろうか？

考えても人間のことなどほとんど知らないテーノにはわからなかったが、実際そのようなことはどうでも良かった。

ドワーフ族は鉱山から採れるさまざまな輝石や、魔物から取れる魔石を加工する技術に長けており、また、トレーディングによりかなりの金額の黒字をいつもはじき出している。

それだけでなく、衣食住どれも自分達ですべてまかなうことができる彼らは金銭に対する感覚が人間族たちと比べてかなりあいまいだった。

基本的に、実直で仕事熱心、派手なことが嫌いな彼らはどの種族と比べても一番お金をためているのかもしれない。

反対に南に住む同じような小柄な種族エルフどもはいつも歌って踊ってばかりの派手好きな浪費家だった。

テーノはエルフのことを思い出してうんざりしたように首を振った。

まあ、そんなことはどうでもいいわ。

この小さな女の子の洋服はあまりに高価で、あまり人目に付かせるのもまずいだらう。

首飾りもできるだけ隠しておいた方がいいね。

ぬいぐるみは……、まあしょうがないかねえ。

あの子が手放すとは思えないしね。

私が何とかしてやらなきゃね。

テーノはまず手始めに先日手にはいった皮を使って作る洋服のデザインを可愛らしい女の子用に作ることに決めた。

第五話 驚きの白い本

テーノの手伝いとして朝食の後片付けを手伝った後、今や日課となった語学学習のためにゼノンの部屋に向かった。ゼノンの部屋は壁全体がほぼ本棚で埋まっておりそこには大切そうに革表紙の本が沢山並んでいた。

いつものようにゆったりとゆりいすに座って、パイプをふかしながら最近トレーダーから仕入れたまだ真新しい本を読んでいたゼノンは羊皮紙をめくる手を止め、芽衣に向かって微笑んだ。

『メイ、今日は少しいままだと違うことをしようか』

ゼノンが芽衣を見ていたずらっぽく笑った。

『ゼノン、違うこと、何、ですか？』

芽衣は一生懸命質問する。

『今日からこれを使うのだよ』

ゼノンが芽衣に手渡したのは黒く染められた板つまり黒板と白墨だった。

芽衣はゼノンが予想していたように黒板とチョークに驚くことはなく、当然のように用途がわかっているようだった。白墨は石灰岩が豊富にとれる山からドワーフ族が開発した輸出品で、それほど各地に広まっているものとは思えないのだがメイはすでに知っているとは。

『文字教えてくれるですか？』

ゼノンはうれしそうに聞いてくるメイを見て、（村のほかの子供達ならはだして逃げ出すようなことなのに！）純粹に喜んだ。

『さすがだね、メイ。これが文字を書く練習のものだと良くわかったね』

ゼノンの言葉に芽衣は少し戸惑ったような顔をした後、思ったままを答えた。

『ハイ。私、それ同じあった、見た。文字教えるところ。先生この板使う、壁大きいこの板あった。この白同じ。書く使う。子供、書く、白い本』

ゼノンはもう芽衣の片言にもだいぶ慣れていたので、彼女が言いたいことは大体わかったが、最後の子供が白い本に書くというところがいまいち良くわからなかった。

『メイ、白い本というのはなんだい？本は普通は文字がすでに書かれているから白くはないだろう？それに、先生が黒板を使って、子供達は、本に書くのかい？もう一度説明してくれるかな？』

ゼノンにとっては貴重で高価な本に練習のために文字を書き込むなど言語道断だった。しかし芽衣にしてみれば普通にあふれかえっていた安いもので数十円から買えるノートがこの世界では常識ではないことがまだ良くわかっていなかった。

なので、テディのおなかから取り出したノートを実際に見せて説明しようとしたときこれほど驚かれるとは思わず芽衣の方が動揺してしまった。

『これは…!』

『白い本。「ノート」』

芽衣はとりあえず、これのことを言っていたのだと説明するためにそのノートに持っていたペンで日本語でメイと書いた。

『なんてもつたいない!』

ゼノンはそれによけい驚いてまるで芽衣が悪いことをしてるみたいに見た。

『メイ、書く。これ、白い本、買う、いっぱい。書く、大丈夫』

なんとか伝わっただろうか？でも、いっぱい買うといってもいまはどうやら簡単には買えそうもないことがゼノンの反応でわかってがっかりした。

『メイ、ちよつとその本を「ノート」だったかな？私に見せてくれるかい?』

ゼノンが興奮を抑えたように聞くので芽衣は素直に渡した。

なんとということだ！

この白い本はメイがいうとおりまさしく白く、一枚一枚が均一の大きさに驚くほど薄く、その上きれいな平らだった。

表紙は鮮やかな空の色をしており、なにやら文字らしきものが書

かれているが、いったいどのようなインクを使ったのか、これも良
くわからない。

中の白いページも、薄い青色で均一な線が何本も走っており、初め
の方のページにはメイの文 字でその線に沿うよう何かが書かれて
いる。どのページも、メイのものと思われる字以外には、何も書か
れていない。

どう見ても自分が普段見慣れている本、そう、羊皮紙を使つてつ
づつた本とはまったく素材からして違う。

これは何の動物の皮なのだ？

それとも、もしかやこれは皮でさえないのかもしれない。

こんなものはいままで見たことがない。

人間族の町にはこんなものが普通に回っているのか？本当に？
何かが違うといっている。

テーノが言っていて初めて気付いたが、彼女が初めに着ていた服
も、そしていつも肌身離さずつけているペンダント、そして、「テ
ディ」もどれも技術的にかなり進んだもののようだ。

それにしてもこの紙はいったい何でできているのか？

表紙部分の明るい色も、私の知っているどの染料でも出せない色
だ。

なにかが引つかかるがどうしてもわからない。

『メイ、これはどうやって手に入れたんだい？』

メイに聞いてみるが、彼女には意味が本質的にわかっていないよ
うだったので、自分が持っている本を一冊メイに手渡して中の紙を
見てみるよう指示した。

『これ、紙、違います。皮？』

疑問系で聞く彼女の驚きの様子を見て初めて羊皮紙の方こそ彼女

には珍しいことがはじめてわかった。

『紙、つくる、木、草。メイ、わかる、少しだけ』

メイがまた驚くことを言っている。彼女の言うことを信じるとどうやら、木や草から紙を作れるらしい。

だが、いったいどうやって？

言われてノートをもう一度開いてよく近くで見ると細かい紋様のようなものが見える。少しそれが気になり、窓から入る太陽の光にかざすと繊維が折り重なっているように確かに見える。

植物の繊維でこれを作ったのか？だがこの白さはいったいどうやって？それにこのように繊維を細かくする技術、くつつけて薄くする技術。今までまったく聞いたこともない技術だ。

その紙の作り方には興味があるが、今日は彼女に文字を教えることが大事だ。

メイがもつと流暢に言葉が話せるようにできるだけのことをしてあげたい。

おいおい、紙のことはメイにわかる範囲で聞いていこう。

『メイ、悪かったね。それじゃ初めの予定通り、早速文字を練習しようね。まずはすべての文字を書いたものを見せるからそれをお手本に、黒板に練習をしなさい』

芽衣は、ゼノンが初めの予定を思い出してくれてほつとした。

ゼノンの言うとおりに、しっかりとお手本を見ながら文字を書いていく。

時折ゼノンが、手を添えて正しい書き方を教えてくれた。

芽衣は丁寧に一文字一文字丁寧に覚えながら書いていきながら、先ほどの紙についてのやり取りについて考えていた。

ゼノンの様子からして、この世界には自分が良く知る紙は存在しないみたいだ。もしかしたらあるのかもしれないけど、ゼノンはカルチャーショックを受けていたみたいなので、見たことはないんだろう。

そして、ゼノンが持っている本は、今までまったく気にしていなかったけど、どうやら昔のヨーロッパの国にあった羊皮紙という動物の皮で作った紙に似ている。

以前、パパとママと一緒に行った博物館でガラス越しに見たことがあったけれど、あの黄ばんだ色といい、見た目がよく似ている。きつと羊皮紙だ。

よくわからないが、どうやら本はすごく高いものらしいこともノートに名前を書き込んだときのゼノンの様子でわかった。

ノートはこれからあまり使わないようにしないといけないかも。

それにしても、本がそれほど貴重品ならば、芽衣がほしいと思っている自分の世界に帰るための方法が書かれた本を探すのは凄く難しいかもしれない。

ゼノンの部屋には沢山の本があったので、本自体は普通にそこいらで手に入るものだと思っていたが、そうではないのかもしれない。

そのことに少しがつくりしたが、まだそうと決まったわけではないので、今はできることをやるだけやろうと必死で文字を書き続けた。

時々、休憩のためにテーノが焼いてくれたクッキーを食べたりしながら夕食前までにはすべての文字を見ないでもかけるようになっていた。

『大変よくできました。メイ、随分上手に書けるようになったね。それではその黒板と白墨はメイに上げるからじぶんでも、手の空いたときなんかに練習をするんだよ』

ゼノンの言葉にメイはしっかりとうなずいた。頑張ろう。文字が読めるようにならないと本を読むことなど出来ないのだし。

第六話 料理

森に住むドワーフたちは洞窟の採掘場で働く若い元気なドワーフたちのために毎日食事を届けることが仕事だった。女達は年をとったり怪我をして洞窟で働くのが難しい男達と昼間森の中を回り、たくさんの食料を手に入れてそれを料理し温かい料理を届けるのだった。

メイは毎日、語学の勉強をしていたが、体が良くなってからはテーノと一緒に森の中に食材を調達に出かけるのが日課になっていた。都会育ちのメイにはその森は宝物の山のように思えた。

きらきら光る赤い実や、可愛いピンクのお花畑。飛び交う鳥達は美しくさえずり、泉の水は飲んだら頭がキーンとなるくらい冷たくて美味しい。

「メイ、その赤い実は美味しそうに見えるけど、口に入れるんじゃないよ。そのままでは渋すぎるからね」

メイが綺麗な赤い実をもちで食べても大丈夫かとテーノに聞くとテーノがあわててためだといった。

「テーノ、それならどうしてこの実を摘むの？」

メイが小首を傾げてテーノを見上げる。

「これはね、天日で乾燥させると甘くて美味しい保存食になるんだよ。栄養価も高いし、よく覚えておくと良いよ」

テーノはそういいながら小さな籠にいっぱいになる程度にその実

を摘んだ。

森のことなら何でも良く知っているテーノが丁寧にどれが食べれるものかを教えてくれるのが、とっても嬉しい。

好奇心旺盛な年頃のメイが何を聞いても嫌な顔ひとつせず、一つ一つ説明してくれるテーノもまたメイにとって素晴らしい教師だった。

日本にいた頃はパパもママもとっても忙しくて休日も一緒にゆっくり過ごすことがあまりなかったので、今のようになぜンやテーノがいつも構ってくれるのが素直に嬉しかった。

初めは見たこともない植物ばかりでどの植物もなかなか違いがわからなかったが、テーノを手伝ううちにコツがつかめてきたように細かい違いもわかるようになって来た。

「そろそろボツカ芋が食べごろの大きさに育ってきてるね。夜はまだ少し冷えるし、今晚はあったかい山鳥とボツカのシチューを作ろうかね」

そのシチューはなんとなくクリームシチューのような味がして、メイのお気に入りの料理の一つだった。

「うん！テーノ、私にも手伝わせてね」

鶯色の目をきらきらさせて嬉しそうにそういうメイにテーノは嬉しそうに微笑んだ。

森での食料の採集も体力はあるけどとても楽しい。

テーノの作る料理がとっても美味しいのでそれが毎日楽しくみだ。

重たいものを運ぶのも、遠くまで歩くのも大分慣れてきたけど、日本ではまだ小さいからとそんなことやったこともなかった。ここでは小さな子も当然のように重い荷物を持つこともお手伝いの一つだし、頑健なドワーフの感覚ではこれ位は軽いものだということもある。

ったのだけれど。メイにとってはやっぱり凄く大変でお家に 帰る頃にはくたくたになってしまう。

でもその疲れも吹っ飛ぶくらいテーノの料理は暖かくて美味しくて栄養もいっぱいだ。

メイは今日の夕食を楽しみにしながらジャガイモとサトイモの中間のようなその芋を丁寧に掘り棒で掘り起こして背中の中籠に積んでいた。

すでに朝方仕掛けておいた鳥用のわなにかかっていた山鳥を三羽もすでに回収済みなので、テーノもまたご機嫌だった。鉋夫たちに持っていく分も十分に出来るだろう。

森には美味しい木の実や、果物もたくさんあったし、煮込み料理に使える根菜類などの野菜なども豊富だった。そのためかドワーフたちは狩猟採集民族のようで畑や家畜などはいないようだった。確かにわざわざ森を拓いて畑を作るより、そこにある豊かな恵みがあるがままに受け止め、旬の食材を使って料理することは理にかなっているように思われた。

スーパーで季節に関係なく食べたいものを好きなだけ買ってくることができる日本とはまったく違うが、幼いメイにしてみれば主婦であつたわけでもないのだからそれほど違和感を感じないままテーノについて学ぶ自然との共生のあり方がすなりと身についていった。

ある程度の年齢になっていたら、メイにしてもここまで生活に慣れるのに簡単にはいかなかったかも知れない。

テーノは小さな手を良く動かしながら果物を採っているメイを見下ろしながらふつと微笑んだ。

初めて森に食材を集めるために連れて来たときあまりにもメイが非力でびっくりとしたものだ。あれからもう3回の月が満ち欠けを繰り返した今、メイはおそらく同年齢の子供（メイの方が背は随分高いのだけ）程度には重いものも運べる程度にお手伝いができる

るようになった。

何より頭が驚くほど良くて、大抵のことは聞き返さずにもう覚えてしまっていた。

食べ物のことも驚くほど良く覚えていて毒になるきのこもうちやんと見分けがついている。

ただ、好奇心が旺盛過ぎるのが玉に瑕でうつかりとして危ない場所に踏み込みそうになることが多々あるのが危なっかしくて目が離せない。

一度大型の獣の巢の近くまで行っているのを見つけたときは本当に肝が冷えて初めてお説教をしたものだった。

こんなメイが元の世界ではおとなしくて家にいつもいてばかりの子供だったとはテーノはちっとも気づかなかった。

とはいえ、それからはメイもできるだけ危ない行っではいけない場所や、してはいけないこともよく覚えて聞き分けよくしている。

その上最近はお料理も覚えたいようで、テーノが作っているところをよく見ているのでテーノが知っているいろんな料理を教えている。

メイは料理が好きだ。

テーノが丁寧に教えてくれるドワーフ族の食事はとっても美味しくて覚えたいが、日本で食べていたものがやっぱり食べたいなあ。

日本にいた頃はお手伝いさんと一緒にお料理を良くしていたが、残念ながらその頃に学んだ料理を作るには食材も、調味料も整っていない。

お醤油もお味噌もやっぱり手に入りそうもないよなあ。

メイは少し残念だったけど、持ち前の柔軟な発想で鳥の卵と酢の代わりにレモンに似たすっぱい柑橘類の絞り汁と植物から抽出した

油とを混ぜてマヨネーズが何度目かの失敗の後分量がうまくいったように成功したときは大喜びしてテーノに味見してもらった。

「ん？なんだか珍しい味だねえ。」

そういうテーノに、生で食べられる野菜をいくつか刻んでサラダを作ってそれにかけて食べてもらった。

「うん。食べたことのない味だけどとっても美味しいよ。」

テーノに褒めてもらい、その晩の食卓の一品にサラダをつけることになってメイは凄くうれしかった。

この世界には小麦粉も塩もあるし。よし、明日はうどんの麺に挑戦だ！

第七話 パパとママに会いたい（前書き）

随分と更新の間が開いてしまってますみません。

第七話 パパとママに会いたい

メイは言葉が何とか通じだした頃から今迄何度も両親のこと若しくは、あちらの世界のことを知らないかを聞こうと随分と努力してきた。今まで学んだ自分が知ってる限りの言葉と身振りも使ってゼノンたちに一生懸命聞いてみたが、二人ともまったく知らないらしいことがわかったただだった。

「お前を見つけたとき、お前はたった一人で森の入り口近くで倒れておったよ。周りにはお前の両親らしき人たちどころか、乗り物も、手がかりになりそうな物も、足跡さえも何も残っていなかったよ」

ゼノンがメイの目を見ながら答えた。これでもうすでに何度目かになる説明に肩を落とす様子にゼノンも心を痛めていた。テーノもまた心配そうにメイを見ている。

約三ヶ月ほど経ち、以前は言われている言葉もよくわからずでいただけだったが、メイは驚くほど流暢に中原の共通語を操れるようになっていた。今ではドワーフ独自の言葉でさえ随分流暢になっている。

しかしその言語能力をもつてしてもゼノンたちが知らないものまで聞きだせるものではない。

パパもママも向こうの世界にいるままなのかな？

メイだけがこちらに来たのだとして、どうやってこの世界に渡って来たのだろう。

不思議なことが起こったのは間違いないが、いったいどういう状況でこの世界にくることになったのか、いまだにわからない。

両親が共に元気でいるのかさえ手がかりもないのでわからないの

は辛い。

メイがまたいつものように落ち込んでしまったので、ゼノンは何とかメイに元気を出してもらおうと考えた。

「お前は随分と傷ついていたし、私としてもそれほど念入りに周りを調べて見たわけではないだよ。お前も最近はテーノと共に森歩きにも慣れてきたようだし、もしお前がそこまでして知りたいのなら、明日にでももう一度お前を見つけた場所に連れて行ってあげようかね。少し森の奥のほうにあるのでそうだね、半日は歩かないといけないがね。まあ、運がよければ何か思い出せるかも知れないね」

ゼノンが励ますようにそういつてくれたけど、メイが見つかったからもう随分、三ヶ月はたっているので、何かが見つかるとは思えなかった。だけど、優しいゼノンの気持ちも嬉しかったし万が一の為にそこに行くことにした。

「メイ、そうだ。お前が前に話してくれたお前の国の話をもう少し聞かせてくれるかい？」

テーノがにつこりと微笑みかけてくれた。

気分を変えようと話題を変えてくれたようだ。

ゼノンにしてもそのことはとても興味があったので異存はない。

「私が住んでいたのは青い『地球』という……『惑星』ってなんていったらいいのかな……？」うーん、場所で、その『日本』という海に囲まれた島国の首都に住んでいたの。日本はとっても物が豊かで、でも人がとっても多くていつもみんな忙しい忙いって言うってた。ドワーフ族とは違って、森の中には住んでないの。あまり周り

「ここみたいに木はなかったわ」

メイは何とかゼノンにわかりやすいように答えようと一生懸命日本語交じりながら考えて答えた。いくつかの言葉はゼノンたちが普段使わない類だったり、固有名詞だったりしたので日本語を交えなければいけなかったのだ。

ゼノンはいろいろ聞きたいこともあったが、ここはとりあえず黙ってメイの思うように話させることにした。テーノも口を挟んで質問をしたそうだったが、ゼノンに目配せされておとなしく聴くことにした。

「わたしのパパはたくさんの人が働いている『会社』で、そこで作った物を別の大きな『会社』に売るお仕事をしていたの。少しトレーダーのお仕事に似てるかも。ママは服を作ってそれをお店で売っていたの。わたしはまだ小さいから『幼稚園』に行ってたの。『幼稚園』は同じ年頃の子供が遊んで勉強をするところ。もうすぐ『小学校』というところでもう少し難しいお勉強をすることになるの。ううん、なってたの」

メイは日数的にもう小学校の入学式はとおの昔に終わってしまった頃だろうとわかっていたので言い直した。ゼノンもテーノもメイがさびしそうに最後を言い直したのを聞いて不憫に思ったが、メイは気を取り直したようにそのまま続けた。

「夜にお空に見えるお月様は黄色くてひとつしかないの。あと、人間のほかには動物がすんでるくらいでドワーフ族は見たことなかったわ。もしかしたら遠くに住んでるのかもしれないけど……、わたしは本でしか読んだことないの。背の低い人たちのお話」

ゼノンがメイの話を聞きながらじっと考え込む。

「月がひとつしかない世界……。うん。なかなか信じがたかったが、やはりメイ、お前はことは違う世界からやってきたということになるようだね。私達はね、はじめは、お前は这个世界の人間族の娘だと思っていたんだよ」

ゼノンがそういうとメイはびっくりした。

ゼノンたちに言葉を教えてもらうなか、这个世界のことについても随分教えてもらっていたので、人間族という、大柄な種族が住んでいることは知っていた。しかし違う世界にすることがわかってから一度も周りで人間を見たことがなかったこともあり、メイはもしかしたらこの 世界の人間族は自分達とは見かけも何も違うかもしれないと思っていたのだ。

「この世界の人間族はわたしと似た外見なの？」

ゼノンはうなずいた。

「そうだよ。見た目は良く似ているね。われわれドワーフ族とはちがいが、力はあまりないが、背は成人の男性で、一般的にドワーフ族より頭3つ分くらい高いのではないかな。耳の形もわれらと違い、お前とよく似た丸い小さなものをもっているね。私はトレーディングでくる商人の者達にしかあつたことはないがね」

メイは自分とよく似ているという人間族の商人の話聞いてあつてみたいと思った。

「人間はよく来るの？」

ここに来てから大体3ヶ月は経つ。次にくるのはいつなのだろう？

「そうだね、いつもは夏になる少し前くらいに来るから後、一の月が満ち欠けを後もう一つ繰返した頃じゃないかな」

メイは、一の月というのが二つある月の少し赤みがかった大きな方のものであることを思い出して、今までの三ヶ月ほどの滞在でどのくらい月が満ち欠けしたか考えてみた。

初めて二つの月を見つけたのは目覚めて3日目だった。その時赤のお月様はほぼ満月に近かった。その2日後に来た満月の日から14日で一度お月様はかけていった後、まただんだん大きくなって、また14日で満月になったわ。

ということは一度月が満ち欠けするのが28日。地球とほぼ同じ周期でお月様が満ち欠けしてることになる。それを一ヶ月だと数えて……。

おととい一の月は満月だったから。

「それなら、あと、26日後の一の月が満月の日くらいにくるのかな」

メイがつぶやくように言ったのを聞いてゼノンは驚いた。

「お前はいつたい今どうやってその日数を割り出したんだい？」

ゼノンが驚いているのを不思議に思いつつメイはどうやったのかこたえた。

「お前、まさか計算もできるのかい？」

メイはゼノンがおもわず興奮したように聞いてきたので少し怯えたように体をすくませた。

「別にできることが悪いと言っているわけではないだよ。ただお前のような小さな子が月をきちゃんと観測して、そこから日数を割り出すなんてできることに驚いたのだよ」

ゼノンは内心、舌を巻くほど驚いていたがどうしたことが怯えているメイを安心させるためゆっくりと目を見て答えてあげた。

メイもゼノンの目をじっと見つめ返した後、ほおつと息を吐いた。

「私、他の子とちょっと違うからお友達がいなかったの……」

メイは競争が厳しい有名な私立幼稚園に通っていたけれどもそこでも異例なほど飛びぬけて頭の回転が良かったので、年の近い子とはあまり馴染めなかったどころか、仲間はずれにされていた。とくに小学校の受験はトップクラスの成績で有名私立に合格していたので、そのこともやつかみの対象だった。

普段からあまりみんなと違うことをするといじめられるのでいつも一人ぼつんと隅で遊んでいたことを思い出したのだ。

ゼノンはメイの話を聞いてひとつうなずいた。なるほど。この子はあちらの人間族の中でもやはり特に嫉妬をされるほど頭のいい子なのだろう。言葉を覚えるスピードにも驚いたが、月の満ち欠けを冷静に観察していたことも、読み書きに計算までできるとなると本当にわれらドワーフの子供とはまったく違うな。うーん、これは鍛え甲斐のある生徒ができたものだ。

「うむ。嫌なことを思い出させてしまって悪かったね。私はお前が計算もできてとても賢い子だと再確認してただけだったのだよ。そう、話を戻すがトレーダーが来るのがおそらくお前が言ったように26日後位だろうと思う。お前、人間族に会いたいのだろうか？」

メイはそれを聞いてこくりとうなずいた。

「会って、どうしたいのかな？」

ゼノンにはメイがなんと答えるのか興味があつた。

テーノは何か怯えたような表情をしてじつとメイの答えを待った。

「帰れる方法がないかさがしたいの。人間族に他の世界から来た人が他にいないか聞きたいの。沢山人がいるところか、沢山本があるところなら何か分かるかもしれないから。パパとママのいるお家に帰りたいの」

うつむくメイの目から涙がひとつこぼれた。

第八話 巨木と風の癒し

昨夜は両親をそして故郷を想って泣き出したメイを泣きつかれて眠ってしまうまでテーノが抱きしめてなだめてあげていた。

今までほとんど泣き言も言わず、一生懸命言葉を学んでいたメイを見ていたので、あの子がまだほんの小さな娘だということをどこかで忘れてしまっていたようだ。

まだまだ両親に甘えたいという気持ちがあってもおかしくはないだろう。

人間族と比べてどれほど違うのかは分かんが、一般的に早く親元を離れるわれらドワーフ族の子供達でさえ、少なくとも10回季節が巡ってくるまでは親元を離れない。

メイは本来親元で大切に育てられているべき年齢だろう。

そう考えればこの子が家を恋しく思っている気持ちも当然であるのに。

何を教えても楽しそうにあつという間に吸収して、その先を質問してくるようなメイにいつの間にか、必要以上の愛情を感じてしまつて入るのかもしれない。あまりにいつも楽しそうにしていたので、本当はここにずっといたいのではないかと期待をしてしまっていたのだろうか。どうやらこの子をうちで預かっているのかという本来の目的をいつのまにか忘れていたようだ。いや、私自身がこのことと共にあることが楽しくて、いつまでもこの暖かい関係を続けたいと心の中で望んでいたからだろうか……。この子が自分の両親の元に帰る為に必死に言葉を覚えていることを、なんとか家に帰るための手がかりを探したいというも思っているだろうこともちゃんとわかつているつもりだったのに……。

ゼノンは朝食を3人で囲んで食べながらそつとメイの様子を伺った。

今日は新しくテーノが仕立てて上げた可愛らしい女の子用のドワーフの衣装を身にまとい、テーノと嬉しそうに話している。森歩き用のフード付きのケープ、動きやすいズボンに可愛らしいチュニツクも珍しくビーズを使って装飾を施した随分気合がはいったものだった。可愛らしいブーツも森歩きに適したものをテーノが用意していた。

昨日ないていた名残が目が少しはれてはいるようだがそれ以外には特に問題はなさそうだ。

そうは言ってもまだ少しいつもより元気がないようだが食事はきちんと食べている。

「メイ、とっても似合っているね。そうやって、ドワーフの衣装を着ていると私たちにかわいいドワーフの娘ができたようだよ。」

ゼノンは半分以上本気でそういつてメイに微笑んだ。

「さあ、食事が終わったら昨日はなしていたようにお前を見つけた場所に連れて行ってあげようね。でも昨日言ったようにあまり期待はしない方がよいぞ。」

少しためらった後ゼノンはメイにそう言った。

メイは可愛らしく微笑み、ありがとうとゼノンに言った。

朝のさわやかな日差しが木々の間からこぼれ美しい光のリボンをあちらこちらにばら撒いている。メイはゼノンとともにいつも食糧

を調達する場所より更に離れた場所に来ていた。

メイが森の中を嬉しそうに見て回っているのをゼノンは少し安心して見つめていた。

よかった。昨日は随分と泣かせてしまったから心配だったが、今日はもうこのように元気に周りを見回る余裕もあるようだ。この子は精神的なものも随分と強いようだな。

「そろそろ見えてくるが、今から行くのは、エルフ族の住む村とも比較的近い泉からさほど離れていない大木のあたりだ。普段私はそのあたりまで出ることはあまりないのだが、その日はその泉のほとりにのみ生える薬草を冬場に備えてとりに行った帰りだった。少し疲れたので休憩しようとその大木の根元に腰掛けようとしたところ、お前を見つけたのだよ。ほら、これがその泉そして、見えるかい？あの大木の根元付近の茂みの中でお前が傷ついて倒れていた。」

メイは美しく澄んだ水を湛えた泉を見て感嘆のため息をついた後、ゼノンの指差す方を見てその巨大な森の主のようにたたずむ木の偉容をみて息を呑んだ。

「大きいね！」

メイの反応に柔らかに微笑んでゼノンは話を続けた。

「そう、お前はその大きな木の根元から大体このくらい離れたそうだな。このあたりにあちらを頭にたくさんの葉っぱに埋もれるように倒れていたのだ。私は最初、近くに住むエルフ族がまた飲んで酔っ払って倒れているのかと思い、始めはそのまま通り過ぎようと思ったのだが、お前の変わった服装とその傷に気付いて近づいたのだ。近づいて見ると人間族の少女だ。お前はデディを抱きかかえ

ており、私が離そうとしても必死で抱きしめていたので大事なものだと思いそのままにしておいた。周りを見回してみても乗り物の痕跡はおるか、おまえ自身の足跡さえ残っていない。ただ、お前が倒れていたあたりに大木の葉が随分と落ちていたこともあるし、随分上のほうから枝が折れているのも見た。まるでお前を誰かが空の上から放り投げでもしたかのようなだった。私は驚いてお前の傷を検めたよ。どうやらたくさん敷かれていた葉っぱが更に緩衝材の役目を果たしたのか、幸い、大した出血もなく骨折もしてないようだったが、まだ春先の朝晩は冷え込む森に気を失っている小さなお前をそのままにしておけず、負ぶって連れ帰ってきたのだよ。お前はいたいどうやってここにやってきたんだろうね？まさか本当に空の上から？」

ゼノンが淡々と語るのを聞いていて、メイも疑問に思った。

何で覚えてないのかな？私本当に寝てる間にここに来たのかな？

パジャマを着てなかったからきつと家にはまだ着いてなかったはず。それなら車の中で眠ってしまったって間にここに来たことになるのだが。

なんで私だけここにいるの？パパもママも一緒にいたはずなのに…。

メイは昨日の夜、おそらく異世界から迷い込んできただろうことをはじめてゼノンとテーノに話した。そのときに、ゼノンならもしかしてそういう話をきいたこともあるかもしれないと念のため聞いてみた。しかし残念ながらゼノンは知らないということだった。

ドワーフの賢者であるゼノンでさえ知らないならやはり他の種族に聞いてみるしかない。特にゼノンが以前話してくれた中原にある

人間の住む大都市の図書館なら何かの記録があるかもということに期待するしかない。中原まではなんと魔物も沢山出る場所をとおつてすごく大変な旅をしないとたどり着けないし、とつてもとつても遠いと聞いている。行くのは命がけだし、もう2人にも二度と会えないかもしれない。

あ、ゼノンすごく心配そうな顔してる。昨日いっぱいないちゃったからなあ。

また情けない顔をしてるからきつと心配してるのだろうと思い、メイが無理に微笑もうとするとゼノンがほんとその小さな体格と反比例して大きな暖かい手を頭に載せてくしゃくしゃと　メイの髪の毛をかき混ぜた。

あつたかい手だな。

何か懐かしい思いがして思わずメイは涙がまたこぼれそうになった。

「メイ、お前がどこからどうやって来たのかは私達にも分からんが、ごらん、さっき言ったようにこの大きな木がお前が落ちてくるときにその体を張ってお前を守ってくれたんだよ。枝も沢山折れて、葉も沢山落としたが、おかげでお前はかすり傷と言っていい程度の傷と打ち身くらいですんだ。この世界はお前を歓迎しているし、私達もお前のことを大切に思っているよ。」

ゼノンが少し恥ずかしそうに訥々とメイにそう真摯に語り掛ける少し落ち着いて考えられるようになった。

そっか。この大きな木が私のこと助けてくれたんだ。すごいな。

守ってくれたんだね。

メイは改めてその巨木を見上げた後、タタタと木に近寄って思いっきり抱きしめた。

木が暖かい。

目を閉じてそっと耳を寄せると鼓動のような音が聞こえた気がした。

「大木さん、助けてくれてどうもありがとう。」

メイがささやくようにそう木に語り掛けるとあたりから不思議な気配が漂ってきた。

「魔力？」

ゼノンがそういった気がしたがメイは不思議な気配がとっても気持ちよくてうつとりと目をつぶっていた。ゼノンの言葉でも癒されていなかったメイの心の中の冷たくて固い物がするすると解けていけていくようだった。

「魔力？」

ゼノンは己で言った言葉に随分と驚いた。この大木は確かに樹齢も恐ろしく長く、長寿なドワーフ族である自分の祖父の代にはすでに随分と大きかったということもあり、少なくとも数千年は経っているのではないだろうか。そのため森の主のような気配を感じさせ

ることがあった。だが、魔力？

この木から魔力を感じるなど初めてのことだ。

魔力といっても、特に何か意思を感じさせるものではなく、どちらかといえば穏やかな癒しの気配を漂わせている。メイがうつとりとしているのも不思議はないだろう。

メイに、この世界は彼女を歓迎しているといった言葉が図らずも本当のことのようなのだ。普段意思を持つものでないはずの巨木がメイを本当に守ろうとする意思でもあったかのように彼女の大怪我を防ぎ、おそらく命を救い、今も親元を離れた可哀想な子供に暖かな癒しの魔力を注いでいるようだ。考えてみると、あの日に自分がこの森の奥の通常はまず来ないこの場所に導かれるように向かったことも偶然と思っではいたが、まるで何かの意思の力で連れてこられていたような気さえする。エルフ族の集落の方が近いのに、あのお気楽で薄情で怠け者なうえ移り気な連中ではなく、ドワーフである私が見つけることができたこともこの子にとっては幸いだったのではないだろうか？

今も小さな体をいっぱい伸ばして嬉しそうにくすぐったそうに微笑みながら巨木を抱きしめるメイにさわさわと森の優しい風が吹き、彼女の茶色い巻き毛を遊ばうというようにゆすっているのも風の妖精のシルフどもの仕業のようだ。メイは気付いていないのかただくすぐったそうに首をすくめるばかりだ。

本当に空から落っこちて来ちゃったのかな？

この大きな木が助けてくれてなかったら、そしてゼノンが見つけてくれていなかったらどうなっていただろうと想像するとぶるりと震えた。本当に運が良かった。

季節にしても、ここに来たときはもうすでに春の暖かさがあつたから。もう少し前にここに着てたら寒い雪が降り積もってもしかしたらゼノンさんに見つかる以前に凍えちゃってたかも知れない。

ゼノンが言うようにこの世界に歓迎されてるって考えたらとつても嬉しい。これからどうやったらパパとママのところに帰る方法を見つけれれるのか、今はまだこのこともほとんどわからないのだけれど。

考えてもわかんないことはしかたないよね。

寂しいけど、どうしようもない。このことは、今はわかんなくてもこの世界のことをもっと知っていったら分かるときが来るのかな？そして、何とか元の世界に帰れる方法を見つけない。

私みたいにどこか違う世界からやってきた人の事もしかしたらいるかもしれないし。

どこかで調べることができると思う。誰か知ってると思う。きっとね！

メイは大木の癒しの力とゼノンの暖かい心配り、それにいたずらに吹いてはくすぐっていく楽しい風のおかげでちょっとつらかった気持ちもあつという間に前向きに方向転換をしたらゼノンの心配そうな様子に気付いて申し訳なく思った。

ゼノンに大丈夫だよという思いを込めて今度こそ心から微笑むとゼノンもいつもの鹿爪らしい顔をほころばせて微笑んでくれた。

第八話 巨木と風の癒し（後書き）

また少し間が開いてしまいましたね。

できるだけ早めの更新を心がけたいと思います。

いつも読んでくださってどうもありがとうございます。

誤字や文章のおかしいところにお気づきの方はどうぞ遠慮なくご指摘いただくと幸いです。

第九話 エルフのたくらみ

メイが暖かくて気持ちいい癒しの魔法で包まれているのを見てゼノンがこの魔力がどこから来ているのかに気付いた丁度同じ頃、二人をこっそりと覗き見ている影がいることにどちらも気付いていなかった。

これはすごいや！

ウォレンは、自分の幸運に驚いていた。

いつものように明け方まで飲んで騒いで知らず眠り込んでいたらしく、目が覚めたらそこは集落に程近い、泉の近くだった。

二日酔いに痛む頭と昨日ギャンブルで豪快に負けてしまったことを思い出して自分の運もこれまでかと帰ろうと思っていたときに物音に気付いてとっさに茂みに潜んだのが幸いした。

初め愚鈍で醜いドワーフの男が、ほっそりとした体の手足の長い栗色の巻き毛の少女といるのを見た時はびっくり我等美しいエルフの娘と一緒にいるのだと思い嫌悪に顔をしかめてしまったが、よく見ると随分と幼い体つきでどうやらあの娘っ子はまだ幼い人間族の娘であることが分かった。

このあたりではほとんど見かけない人間族、それも小さな子供と面白みもないドワーフの男が一緒にいるのを見たときはそりゃあ驚いたが、それよりも話を聞いているとこの娘どうやってか空からおっこちて来てそれでも助かったようだ。

それだけでも十分いい儲け話になりそうな気配なのに、あれはどうやら精霊の愛し子じゃねえか？

エルフ族は精霊使いが多種族と比べてほぼ独占しているといっているほど多いことで有名だった。しかし最近では精霊の愛し子自体の数が随分減ってきて、精霊使いはなかなか手が少ない。それに加えて人間族で精霊魔法を使えるものはほとんどいないため魔法使いどもは研究のためにかなりの数のエルフ族の精霊の愛し子を中原に連れ去っていった。おかげでエルフ族にはかなりの金が礼金としておとされたがそのことがもとで、本来ただ楽しいことが大好きで子供のように悪戯好きなエルフを享楽主義へと貶めたのだとウォレンは思っている。今では酒とタバコ、ギャンブルにおぼれたエルフの若者であふれている。自分もそのうちの一人だということはウォレンも自覚してるが、いまさら昔の生活に戻れるとも思えない。あとはどれだけ楽しめるかだ。

精霊の愛し子は見つかり次第魔法使いどもが高値で買い取ってくれることは周知の事実だ。その上あのわれ等エルフ族と並んでも遜色のない容姿。あれはきつと更に値を上げることに貢献してくれるだろうことは予想に難くない。そう思うとウォレンは思わずにたりと頬が緩むのを感じた。あとはどうやってあの娘っ子をあのドワーフの男から引き離すかだが、あいにく今は二日酔いで体調がいまいちだ。とりあえず、やつらがこの後どこに住んでいるのかを確かめてから後のことはかんがえよう。

ウォレンはこっそりと二人の後をつけてゼノンの家の位置をしつかりと覚えると、二日酔いで痛む頭を抱えてとりあえず、魔法使いとの渡りをどうやってつけようかと計算しながらエルフの集落へと戻っていった。

第十話 精霊の愛し子（前）

テーノはメイが思ったよりも元気そうなのでほっとしていた。

メイは背中にテディを背負ってゼノンと仲良く手をつなぎ、楽しそうにおしゃべりをしながら森の奥から帰ってきている様子を見にくすりと笑った。

あの、ゼノンが小さな人間の娘の手を引いて森を歩いているなんてあの子達が見たらなんていうだろうねえ。

テーノはもうひとり立ちしてしまった子供達が帰ってきたらどれほど驚くかと思ってくすりと笑った。

ゼノンとテーノの子供は男ばかり3人。

もう、所帯を持っているのは一番上の息子のアルツだけだった。

アルツが独り立ちしたのは彼が10歳になった年だったので、もう30年にもなる。それから結婚して可愛い嫁のバーダをもらってからも10年ほどしか経っていない。二人に子供が出来るのはまだまだ先になることだろう。というのも長寿なドワーフ族はあまり子供がすぐにできない。まだほんの40歳になったばかりのアルツはまだまだ父親になるには早すぎるだろう。そのアルツは大多数のドワーフの若者同様鉱山で働いているが、賢者である父に一番似たのか賢く、その上地の魔法も使えるとあって、鉱山でも頼りになる技術者として働いていた。

次男のベルノはドワーフとしては珍しく、森で木こりとして働いている。彼も独立してもう20年は経っているが所帯はまだ持っていない。兄弟でも一番腕っ節の強いベルノはつきり鉱山で働くものだとばかり思っていたのに、集団で働くのが嫌だときこりになる道を選んだときはゼノンもテーノも随分驚いたものだった。とはい

え、なり手の少ない森のきこりは周囲には喜ばれて、結果的にはもちろん体力の要るきこりの仕事は彼にぴったりといえた。

三男のマルスはまだ独り立ちしてから数年しかたっていない少年だ。高名な細工師の下で修行中の細工師見習いとして頑張っている。マルスはまだもっと幼いころから工作が得意で綺麗なものが特別好きな少年だったので、細工師の道を選んだことはベルノのときと違って両親共に納得のいく選択だった。しかし、なんといってもドワーフ族にとどまらず、世界でももっとも高名な細工師として有名なガドルの下で細工の道を学べるようになったと本人から聞いたときはさすがに驚いたものだった。ガドルは弟子を取らないことでも有名だったので。

三人の息子たちは、実家に帰ってくることはもう独り立ちしてしまったので殆どないが、いつか彼らにこのかわいい人間の娘を見せにいつてあげたいな、などとテーノは幸せに考えていた。

メイはゼノンに帰る道すがら、ドワーフ族に伝わる伝承をいくつか話してもらっている間にいつの間にかもう赤い屋根のお家に近づいてきたことに気が付いた。

テーノが庭の手入れをしながらこちらを見て微笑んでいる。

「テーノ、ただいま！」

大きな声でテーノに声を掛け思いつきり抱きついた。テーノは小柄ながらもふくよかで暖かくてメイはテーノに抱きしめてもらうのが大好きだった。

テーノが何か楽しそうに笑っているのを見て芽衣はなんだか分

からないが嬉しくなったのだ。

「おかえり。メイ、ゼノンと一緒に森のお散歩は楽しかったかい？」

テーノはそんなメイをぎゅっと抱きしめ返した。彼女はもちろん二人がゼノンがメイを見つけた場所まで行っていたことを知っていたが、楽しそうな二人の様子にそのことには特に触れなかった。ゼノンは妻が自分達が手をつないで歩いていたのを見て微笑んでいたのに気付いていたが、なにを思っておかしそうにしているのかは気付いていなかった。彼自身は妻がであって3ヶ月ほどの小さな人間の娘に注ぐ惜しみない愛情を感じて同じよう暖かな気持ちになりながら、普段は物静かで奥ゆかしい彼女が自分達の子供等が小さかった頃にもあのようにストレートに愛情表現をしていたなとほほえましく見ていた。

「うん。森の奥の綺麗な泉のところには見たことないお花が沢山咲いてたよ。カノの実はなんかあっちの方がもっと赤くて大きいし、大きなウサギや、鳥もたくさんいたよ。それから……」

メイは一度大きく瞬きをした後、テーノの目を見た。

「すつごく大きな木を見たの。その綺麗な泉のそば。こーんなに大きい。てつぺんまでは首が痛くなるまでぐつと見上げても見えないくらいすつごく高くて、枝がたくさんあってきらきらした綺麗な緑色の葉っぱがたーくさんついてたの。」

テーノも行った事がある森の一番大きな木のことを思い描いてみると、ゼノンがゆっくりとテーノに近づいてくる。

「ゼノンがわたしを見つけたのはそこなんだって。あんまり綺麗な場所でびっくりしちゃった。でも、たくさん枝も折れて葉っぱも落ちちゃったんだって。わたしが落ちてきたから。わたしの事守ってくれたみたいだって、ゼノンが言ってたわ。たくさんたくさん枝も葉も落としてしまっただろうけど……」

メイはそのことに罪悪感を覚えているのか、少し肩を落とした。

「だから、ありがとってお礼を言ったらすごく優しい気持ちくれたの。なんだかふわふわする暖かくてくすぐったいものがぶわわってきたの。そしたらちよつと勇気が出た気がしてなんだか頑張ろうって気持ちになったわ」

メイはその後、思い切るように一気にそう言って、興奮したように頬を紅潮させていた。『暖かくてくすぐったいものがぶわわと？』なんとも子供らしい表現だが、それならテーノにも似たような経験があったので、気が付いた。

少し伺うようにゼノンに視線を送って見るとそうだというようにテーノにうなづく。

まだエルフ族とも仲が良かった子供のころに一度……。その感覚は『癒しの魔法』ではないだろうか、とテーノは思ったのだ。癒しの魔法といっても、今メイが話していたのは精神的なものを癒すというか慰めるごくごく初級の魔法ではないだろうか？ドワーフ族は癒しの魔法は苦手ではほとんど使えない。とはいえ、この初級の癒しの魔法ならば少しは使えるものもある。大体、ドワーフ族で魔法が使えるものは鉱山で採掘時に使われる地系の魔法か、採れる石を加工する火系の魔法を得意とするのがほとんどだ。

ドワーフ族では怪我をしたときも癒しの魔法を使えるものはほほいないので、薬草を使った治療が通常だ。そして賢者と呼ばれていたがゼノンも魔法の行使に関してはあまり得意ではなかった。

では誰が初級とは言え、癒しの魔法を？

「大木だよ。」

第十話 精霊の愛し子（前）（後書き）

九話が随分と短かったので、十話を少し早めにアップしました。
何か、おかしいな部分お気づきの方がいらっしゃったらどうぞお気軽
にお知らせください。
ありがとうございます。

第十一話 精霊の愛し子（後）

「大木だよ。」

ゼノンがまるでテーノがなにを今まで考えていたのかを読んだようにそう言った。

「大木が？」

植物が魔法を使うことはありえるのだろうか？確かに植物には存在そのものから癒しを感じることはあるが、魔力としてはつきりと確立した癒しの魔法を使う植物？今までそのようなことは聞いた事がなかった。

二人が会話をしてるのを見て退屈になったのか、庭で今までテーノが使っていたじょうろを使って「お手伝いするね」といい、庭のあちこちに自生している可愛らしい花に水遣りをしているメイを見ながら不思議に思ったので、夫にそう聞いた。

「ああ。私もそのことには疑問を感じたのだがそれはおそらく精霊の力ではないかと思う。」

ゼノンの言葉にテーノは固まった。

「精霊？ゼノン、つまり木の精霊が？でも、木の精霊なんてほとんど見かけることもないのに！」

「おそらく長い歳月を経てあの大木にも木の精霊が宿っているのではないだろうか。あの子が大木に抱きついているときに感じた

波動は確かに癒しの魔法だった。木の精霊は風の精霊よりも生まれる数がすくないうえ、木むずかしやなので、愛し子の守り手としてはなかなか見ることがないから今まで気付かなかったがね。そうそう、風の精霊といえば、その時周りの精霊が随分騒いでいてシルフなどはメイの髪の毛に絡んで遊んでおったよ。」

ゼノンはそれから少し考えるように目を細めて続けた。

「想像だがね。おそらく、あの日メイはどうやってか空から落ちてきたところを風の精霊によって落下速度を和らげてもらい、木の精霊に体を使って衝撃を受け止めてもらい、そしてまた癒しの魔法で大怪我を免れたのではないだろうかというのが今日の感想だよ。もしかしたら他の精霊も何がしか手伝ってくれていたのかもしれないが今となっては分からないがね。ほらあれを見てごらん」

テーノはゼノンの指差す先で楽しそうに水遣りをしているメイを見た。

「？」

メイが楽しそうに笑いながら水をやると水がきらきらとはじけそこに虹ができている。今まで吹いていなかった風が楽しそうにメイの栗毛をくるくると絡ませる。花達はまるで競うようにメイに見てもらいたいのか芳しい香りを漂わせ、一生懸命花弁を開いて可愛らしく揺れている。

「え？」

精霊がメイと戯れているのだ。

「精霊達の愛し子だよ。」

ゼノンが事実を淡々と述べるようにそういった。

「まさか」

テーノがつぶやくようにそう言った。

「だって、あれだけでも、多分、水と光と風、それに花の精霊まで？ そんなにたくさん精霊に愛されるなんてあるのかい？ だって今までそんな気配、気付きもしなかったのに……。」

ゼノンも少し首をかしげた。

「そうだ。あの子の怪我が少なかったことも、ただ単に運が良かったのかもしれないと今まで特に疑問に思っていなかったんだが。」

「じゃあどうやって精霊の存在に気付いたんだい？ 私は今までそんな様子ちつとも……。」

テーノが言うのももったいなかった。今まで魔力を感知したことはなかったように思える。

「私もあの子があの大木に抱きついてそのときに魔力を感じなかったらおそらく今も気付いていなかったんじゃないかと思う。あれはあの子自身は気付いてないみたいなんだ。ほら、それというのもあの子をいま取り巻いている精霊達には随分弱い力しか感じないだろう？ おそらくあまりにも微弱な魔力で魔法を使えない私達には気付くことができなかったのだと思う。」

ドワーフ族も魔法の使えるものもいるがあまり一般的ではない。

この世界に生きるものは魔力自体は誰でも普通に持っているし、感じるができるが、自然とともに生きるドワーフはあるがまさに自然の恩恵を享受する生活を基盤にしているので、言霊魔法はもちろん問題外だが、一部の特殊な立場のドワーフしか精霊魔法を使えるものはいなかった。ゼノンもテーノも魔法は門外漢だった。とはいえ、ゼノンも賢者。知識としては並みの魔法使いよりは魔法について詳しい。

「それはおいとしてもあの子自身が魔法の使い方も知らないから大きな力の精霊はあまり干渉してきてないのではないかと思う。強すぎる魔力が近くにあると使い方を知らないあの子はおそらく己の中で反応する魔力が暴走して精神に異常をきたしてしまうだろうからね。おそらく力のある精霊はあの子が逆に傷つかないよう直接干渉せずそつと見守っているんじゃないだろうか。」

精霊はあちらこちらにいるものだが、あまり精霊の気配を感じることはない。彼らが通常ドワーフ族も含むヒト（ヒューマノイド型の種族全てを含む）に干渉することはほばないからだ。「精霊の愛し子」というのは珍しく精霊が干渉をしたがるヒトに対して使われる言葉だ。精霊のただの気まぐれだとか、その子の魂の波長が精霊をひきつけるなどといわれているが、実際、なぜ精霊達がそのヒトを気に入って干渉したがるのかは分かっていない。ただ一般的に、精霊は一種類の場合が通常であり、精霊の好みは種類によってかなり大幅に異なるので今メイの周りにいるように何種類もの精霊が競うように干渉することなどは考えられなかった。

精霊魔法が使えるものの絶対条件として精霊の愛し子であることがあげられる。そして、その使える精霊魔法は干渉をしてくるその精霊の属性に限られる。メイは鍛えれば数種の精霊魔法を使える使

い手にさえもなれるかもしれない。精霊使いは数が少なく引く手あまただ。このことがメイの今後に悪い影響を与えなければ良いが。テーノは悪い予感が当たらないようドワーフの守り神に祈り、不安になりながらメイを見つめた。

今となつてみればこれほど下級とはいえ、多くの精霊に愛されて囲まれているメイに気付かなかつたのは本当に不思議だった。確かにメイが来てから一の月が三度満ち欠けを繰り返すほど時が経っていたが、いつもの年よりも恵みが大きかったことに初めて気付いた。森で採れる果物は大振りでおいしく、野菜も豊富だったし、狩もいつもよりもうまくいくことの方が多い。険しい山を流れてくる雪解け水は例年より更にすんでおいしい。泉の水も同じく透明度が高く、甘くておいしい。庭に自生する野生の花々は彩りも鮮やかで種類も豊富で、香りが良いものが揃っている。これも全てまさかメイの為に？

メイは精霊に気付いているのかいないのか、可愛らしいお花に微笑み、水を振りまくたびにできる虹に大喜びしていた。風の精霊のいたずらにはどうやら参っているのか時々くすぐったそうに首をすくめていた。

第十二話 細工師（上）

マルスの一日は朝日の出が出る前におきだして師匠の家の作業場まで通うことから始まる。

マルスの家から師匠の家までは歩いてもほんの数分で、まず作業場の片づけがすんだら、注文を受けている細工物の確認をし、師匠の朝食の準備を済ませる。

師匠がやって来ると朝の挨拶をし一緒に自分の食事も済ませ、その後は昨日までに仕上がった細工物で、商店に売り物とし下ろすものを持って、ドワーフの森のもつともにぎやかな街中まで行かなければならない。

その後その脚で材料の仕入れに鉱山近くの商店まで向かって荷を届ける約束を取り付けたらやつと昼の休憩をもらい、午後はたつぷり師匠の指導の下、細工物を思う存分作ることができるのだ。

マルスは師匠の下で修行をするのが大好きだった。こまごまとしたお使いも、師匠に学べることを思えばまったく苦に思うこともなかった。

師匠はガドルという名前で器用で細工物が得意なドワーフの中でもっとも高名で、なかなか弟子を取らないことで有名だったのでマルスが10回目の誕生日を迎えたその日に弟子入りを願い出たときに、即刻断られたことも周りは誰も不思議に思わなかった。

マルスは一度断られた位ではまったくへこたれず、優しいな風貌に似合わず頑固なところのあるドワーフらしさで何度断られても、毎日弟子入りをお願いしに師匠の下に通った。

その頃、同じように弟子入りを願う、マルスと同年代の数人もマルスに習って弟子入りのために通うようになったが、時が流れ、少しも願いを聞いてくれないガドルにだんだんと熱が冷めたのか、一人、また一人と脱落していった。

それでもあきらめないものが三人残ったのは1の月が3度目に満月を迎える頃だった。

師匠も、これほど長い期間へこたれずに毎日通うマルス達を見て、とうとうほだされたのか、一度だけチャンスを与えるという。

彼ら三人の腕を見るためにいくつかの鉱石の入った箱を渡し、それらを使って三日後までに 特別な誰かのための特別な贈り物を作るように言った。

マルスは目の肥えたドワーフの若者なのでもちろん渡されたそれらがいわゆるくず石と呼ばれる価値のほとんどないものだとはい目で分かっていた。

マルスはじつとその石を見つめ、いったいどうしたものかと考えた。

一人はその石を見て怒りに顔を真っ赤にし、師匠に食って掛かった。

「あなたはなんてひどい人なんだ！こんなくず石で僕らになにが作れるというのですか！もうたくさんだ。俺はこれ以上あなたの弟子になろうなんて気にはなれない！」

彼はそういつて、憤りもあらわに立ち去った。

もう一人はマルスと同じように考えるようにじつと見ていたが、何かいい方法を思いついたのかそれらの石の中でも色が比較的美しく、大きいものをいくつかマルスが何か考えるよりも先に取り出すと、出来上がった持ち帰ってきますと言って去っていった。

師匠は、やはり僕のような者は弟子にできないと遠まわしにこのような方法で伝えようとしているのかな？

マルスは考えるようにしていたが、その時師匠の真剣に探る様に自分を見る姿を目にして腹を決めた。マルスはじっと箱に残った沢山の石を見ていたがどの石も少し輝きが足りなくて美しい細工物などできそうもないものばかりだ。でも、それならば…。

「分かりました。この石を使って、特別な人に特別な贈り物を作ります。」

マルスもそういつて、師匠が何か言う前に箱ごと全てを持って自分の家に帰った。

マルスは三日かけて、自分が思うとおりのものができたと確信できたので、それを持って師匠の下に向かった。

「どうですか？」

すると、師匠の家から最後に残ったもう一人の弟子候補のデミタがすでにきているようだった。デミタの期待に籠もった声を聞いてマルスはいったいどんなものを彼は作ったのか気になった。

「ふむ」

師匠はそういつと手に持っていたデミタが作ったと思われる首飾りをじっくりと観察した後、デミタに返した。

「これは、誰に贈ろうと思って作ったのだい？」

ガドルがそう聞いたときデミタが一瞬はつとしたように見えた。

「これは……、ああ、ユルンに、ええ、ユルンに渡そうと思いい作

りました。」

マルスはそうつと近寄ってその首飾りを見てみた。

デミタは先日師匠にもらった石を使って美しい首飾りを作っていた。

マルスはあるくず石でよくこのようなと一瞬感心したが、真ん中にはどう見てもそのときにもらったものとは思えない美しい真っ赤なルビーと思われる宝石を配していた。

確かにガドル様はくず石以外を使っではいけないとは一言もおっしゃっていなかったが……ユルンに？ユルンはドワーフ族の若い娘たちの中でもおしとやかで一番美しいと評判の娘だ。

「マルスも作ったものを見せなさい。」

師匠はマルスが来ていたことに気付いていたらしく振り返りもせずそういった。

マルスは盗み聞きしていたのがばれてずかしくなり、さっと顔を赤らめたが、気を取り直して持っていたものをガドルに手渡した。

「なんだそれは？そんなくず石ばかりで作ったのが小さな箱一個？」

デミタは、ガドルに聞こえないようこっそりとマルスに向かって鼻で嘲るように笑った。

マルスは顔がまた赤らんでくるのを感じた。確かにデミタの美しい宝石の輝く首飾りの後には自分が作ったものは華やかさに足りずつまらないもののように感じてしまった。

「これは？」

ガドルは、マルスに聞いた。

「はい、これは母に贈る宝石箱にと思い作りました。」

ガドルはじつくりと宝石箱を観察していた。マルスの宝石箱は、平凡ながらも良く磨かれて光沢のある櫪でできた木の箱にガドルが渡した石を、微妙にグラデーションを変えて配置しており、地味ながらも美しく近づいて見るほどに丁寧な仕上がりになっていた。石は丁寧に研磨して一定の大きさに揃えた後、輝きはすくなくながらもそれぞれにある持ち味を生かしてあるのがガドルの目にはちゃんと見えていた。

特別なしかけはないが、それゆえにこの宝石箱に入る本物の宝石を引き立てるのにまさしくうってつけの素晴らしい脇役としての石の飾りとなっていた。

「デミタ、これを見てどう思う?」

ガドルはふと顔をあげるとマルスではなくデミタに聞いた。

「え?どうも何も、平凡で大して美しくもないつまらないものにおもえますが。」

デミタは躊躇なくそう答えた。

「マルスはデミタが作ったものをどうおもう?」

今度はマルスに問うた。

「はい、真ん中の宝石が美しい首飾りですが……、あまりそのほかの石が生かされてなく、またユルンに贈るには少し大人っぽすぎ

るように思えます」

マルスはユルンの可憐で優しげな雰囲気はこの毒々しいほど真っ赤なルビーがついた首飾りはあまり似合わないだろうな、と思いつながら答えた。

「ふむ。2人とももう帰りなさい。マルスは明日、日が出る前に工房まで来なさい」

ガドルはそれだけ言っ立ち去ろうとしてしまった。

2人はあわててガドルを引き止めた。

「ガドル様！どういうことですか！俺ではなくこのマルスを、マルスだけを弟子にとるとおっしゃるのですか！」

マルスはそれを聞いて初めてガドルが言った意味が分かり喜びが込みあがってきた。

「本当ですか！僕を弟子にしていただけなのでしょうが！」

ガドルは振り返ってそれぞれを見つめた。ふうっと大きくひとつため息をつく、珍しくたくさんの言葉をくれた。

「デミタ、お前は細工師として大事な事が分かっていない。確かにお前の作った首飾りは美しいが、それだけだ。それもその美しさは半分以上その宝石の為。それもまたよからう。もしもお前が私の渡した石を理解して、そのちいさな美しさを活かしていたのならな」

ガドルはそういつとデミタに彼の作った首飾りとマルスが作った

宝石箱をよく見るようにと渡した。

デミタははつとしたように自分の作った首飾りに目を落とした。そこには確かに適当にしか磨かれていない小さなくず石たち。マルスの宝石箱をそつと見やるとそこには宝石と呼ぶに足りないとはいえ、すでにくずと呼ぶにふさわしくない、ひっそりとした輝きをもつ石がそつと静かに並んでいるのが見える。暖かな気持ちにさせるようなやわらかい色で統一されたそれらは、マルスの母への優しい想いが伝わってくるようだった。

特別な人の為に特別な物をとったガドルの言葉の意味も忘れていた。ただこの競争に勝つことに気をとられ、誰に贈るのかも考えてはいなかったのは明白だった。そうだ。マルスが指摘したようにユルンにはこの首飾りは似合わないだろう。ユルンの為に本当に作っていたならばせめてユルンのうつくさにあつた淡い色の宝石を配するなど他の工夫ができたはずだ。

「くず石と言われる石にも美しさはある。それを引き出せてこそ、一流の細工師となれるのだ。初めから石の価値にのみとらわれ本来の美しささえも見ようとしなかったお前には思いをどれだけ石にこめられるのが重要な細工師としては一流にはなれないだろう。」

ガドルの言葉を聞いてデミタは初めて己の失敗を知った。

「マルス、お前の作品は荒削りだが才能を感じさせる。石を丁寧に扱う心構えもできているし、お前の母親への優しい思いもその箱にはこめられている。私の元で本気で修行をする気があるのなら、明日の日の出前に工房まで来ることだ。さあ、おまえの作った箱を持って母の元へ帰り、このことを報告してきなさい。明日からしばらく忙しくなるので、お前には弟子としてしっかり働いてもらうかな。」

そういつて今度こそ2人が何も言う前に立ち去った。

マルスは感極まって何も言うことはできなかったが頭を下げて見送った。

デミタは呆然としていたが、もう一度自分が手に持っているその首飾りとマルスの一見平凡な宝石箱を見比べた後、マルスにおめでとうと声を掛け、去っていった。

第十三話 細工師（中）（前書き）

第十三話 細工師（中）

マルスは、弟子入りしてからしばらくは全く細工物に触ることは許されなかった。

師匠は身の回りのこまごまとしたことから、人間のトレーダーとの交渉からまた、ドワーフ族の鉱山で石を直接買い付けることまで細工に関係のない仕事をとにかく朝から晩までさせられる毎日なんだんと焦りを感じていた。

いくら辛抱強いマルスでも弟子入りしてからもう一年以上もこのような仕事ばかりを任せられていると弟子とは名ばかりで本当は小間使いが欲しかっただけなのかも知れないと疑問に思うこともしょっちゅうだった。

実際、弟子入りを同じく目指していたデミタなどは他の細工師に弟子入りし、すでに沢山の作品を作っている。

師匠の言いつけを守り、任せられた仕事を黙々とこなしながらもとうとう我慢ができなくなってしまうた。

「師匠！僕はいつたいいつになったら師匠に細工師として鍛えていただくことができるのでしょうか！」

ガドルはそれを聞いて「ふむ」と一言うなるとじっとマルスを見た。

マルスは早まったことを言ってしまったかもしれないと、一瞬後悔したが、これ以上この惨めな気持ちのままではいられないと勇気を振り絞り、師匠の目を見返した。

ガドルはマルスのその目をじっとにらむように見つめた。

「お前はそれではいつたいい今まで私のなにを見ていたのだ。弟子入りしてからいつたいいなにを学んだのだ。今日はもう家へ帰れ」

ガドルはそれだけを告げるとさっさと自分の作業に戻り、もうマルスを見ることはなかった。

マルスはその言葉にかつとなり、そのまま作業場を走り去った。もうなにがなんだか分からないままに走り続け、気が付くと鉾山の方から続く川のほとりに来ていた。

師匠は分かってくれない。やっぱり僕はただの小間使いだったんだ。

マルスは知らず涙を流していた。

「おい、お前、ないてるのか？」

マルスのはつとして急いで目元を袖でふき取り振り返った。

「デミタ！ どうしてここに…」

そこに立っていたのは今一番会いたくなかったデミタだった。

「どうしてって、お前、ここは俺の師匠の作業場から近い川場だぜ。ここで、鉾山から流れてくるくず石を拾いに来たのさ。」

デミタはそういった後、マルスの顔を見て一瞬驚いたように目を見開いた。

「お前、どうしたんだ？ なんだ、本当に泣いてたのか？」

マルスは恥ずかしくなってうつむいた。

「何だよ。ガドル様になんかいわれたのか？」

デミタはそつとマルスに聞いた。その声は、なんだかとても優しくマルスは思わず日頃思っていたこと、そして今日ガドルに言われたことをデミタに言った。

「ふーん。お前甘えてんな。」

デミタはそういつとマルスのことは気にせず石を拾い出した。

「ああ、お前俺がなんでこんなことをしてるのか気になってるな？」

デミタはマルスの驚いた顔を見てくすくすと笑った。

「おれさ、あの時お前にあのくず石のことで負けたときすつごく悔しかった。お前が作ったあの箱、本当はすごく綺麗だと思ったさ。でもお前に負けを認めんのが嫌だったから……。あれから今の師匠に拾ってもらってもあの時のことが忘れられないんだ。ガドル様はやっぱり凄いいし、あの時の言葉が凄く引かかって、おれくず石でもいい飾り物をつくらうって決めたんだ。だから今は仕事の合間にそのための石を拾ってるってわけさ。」

僕は今までなにをしてきたのだろうか？師匠に言いつけられたことに唯々諾々と従っていたが……。

デミタはあの日、負けた後きちんと学んでいた。

僕はもうだっただろう。ただ弟子にとっていたに喜んできて、何も学ばなかったのか。

あれから師匠はいろいろと細工師に必要な基礎を教えてくださいださっていたのに。

デミタは忙しい中、自分で自分の作品を作ろうと合間に時間を見つけて頑張っているのに。

それなのに。僕は師匠が何も教えてくれないとただ師匠に文句を言っただけだ。

恥ずかしい。

第十四話 細工師（下）

デミタの話を聞いてから、マルスは今までの行いを振り返っていた。

恥ずかしい。

弟子入りを許されたときの気持ちをすっかり忘れてしまっていたんだろうか。

マルスは川辺に座り、しばらく川面をじっと見ながら考えていた。

「マルス？こんなところでボーっとしてたら風邪ひいちゃうわよ」

声が後ろから聞こえた。

マルスが振り返るとそこにはユルンが立っていた。

「ああ、ユルンか……」

ユルンはデミタが以前作った首飾りのときに言い訳に使った美しいドワーフの少女。

ガドルの繊細で美しい作品がとてもよく似合う少女で、ガドルの作品を沢山扱う装飾店の一人娘だ。マルスとは幼馴染で子供の頃からの付き合いだが最近では工房に直接来ては、まだお店に出していない装飾品でいいものがないか探しにやってくるのはおしゃべりをして帰り、マルスとも前より仲良くなっていた。

「もうすぐ日が暮れるわよ。早くうちに帰らないと。ここ寒いわ。」

ユルンが眉根を寄せながらマルスの元まで歩いてきた。

「うん。でも、なんか今はもう少しここにいたいんだ。」

少し肩を落としてマルスはまた川面を眺めた。ユルンは少し驚いたようにマルスを見た。

ユルンはガドルの工房で久しぶりにあったマルスを子供のときの恥ずかしがりやで兄の後ろに隠れてばかりだった頃の印象のままただのおとなしい少年だと思っていたが、だんだんとその芯のしつかりとしたマルスの内面に触れ、折につれ工房によって少しおしゃべりをするのが楽しみになっていた。

そのマルスが小さな子供のように体を丸めている。ユルンはふうとため息をひとつついた。

この様子だとマルスはまだしばらくここにいたいようだ。ユルンは静かにマルスの横に座った。

「ユルン、ユルンこそこんなところにいたら風邪引いちゃうよ？」

マルスは驚いてユルンのほうを向いた。

「だって、マルスはまだ帰りたくないでしょ？マルスったらほつとくと絶対いつまでもここにいて風邪引いちゃうのよ。そして後悔するんだわ。」

ユルンが淡々と川面を見ながらそういった。そして静かに「聞いたの。デミタに。」とつぶやいた。

「マルスは私のことどう思ってるかわかんないけど、私はあなたのことお友達だと思ってるわ。私だって父さんと母さんのお店で働

いてるけど、まだ任せてもらえることはほんの少し。マルスが焦る気もすこしはわかるつもりよ。でも、マルスは何も言ってもくれない。」

ユルンがなんとなく寂しそうに唇をかんでのを見てマルスははっとした。

「ごめんね。ユルンがそんなに心配してくれているのちっとも気付いてなかったよ。ぼくは自分の事で精一杯で、自分の事ばかり考えてたんだね。」

そういつてマルスは着ていた上着を寒そうにしているユルンにそっとかけた。

ユルンと語り合った後、マルスは破門されるかもしれないことを覚悟で工房にもどった。

ユルンと話して気付いたことが沢山あった。

焦っても仕方がないんだ。僕の成長に合わせて師匠が教えてくださっていることに気付いていなかったんだ。そしてガドルに心から謝った。ガドルははじめひどく怒っていたが、マルスの真摯なそして澄んだ茶色の瞳に光る深い決意を見てそれから一ヶ月、工房の出入りを禁じることで許してくれた。

一カ月後にガドルの元に戻ったマルスはその一ヶ月の間に心のままに作った作品を携え改めてガドルに許しを請うた。

ガドルはじつとマルスの目を見つめた。そこには一ヶ月前と比べて更に成長した瞳があった。ガドルはそっと満足そうに目を一瞬眇

めた後、作品に目を落とした。

そこにあつたのは宝石のかけら、いわゆるくず石を用いて作った二揃いの工具だった。

ひとつは師匠への感謝を込めて。もうひとつは自分自身への戒めの思いを込めて。

工具自体はマルスの専門外なので、自分の目利きを最大限に活かして最も優れた工具を街で買い付け、その元は無骨であつた姿を美しく変えていた。

丈夫で長持ちな木材で有名なオーリスの木はきこりをしている二番目の兄のところで兄の為に新しい斧の飾り部分を作る約束で譲ってもらった。

美しい宝石は一番上の兄のところで、使わないかけらの部分をやはり採掘に使うつるはしの飾りを作ること譲ってもらえた。

どちらに行つたときも、師匠の作る最高品質の材料に普段から囲まれていることが普通であつたため、また毎日のお使いでよい品を見分けるほうを学んできたため、一つ一つ見せてもらった材料の候補を自分自身で、傷の具合、密度、乾燥の度合い、色、年数などいろいろな角度から目的に合わせて候補を絞るマルスに兄たち感心していた。

兄たちにたくさんある候補の中から良いものを選んだと褒められやはり今まで気づかない間に教えていただいていたのだと、師匠の偉大さに気付かされたことも思い出した。

一つ一つガドルは手に取って出来をみた。それぞれの工具はグリップの部分は、ただ布を木に巻いただけであつたものを次兄の所からもらってきたオーリスに取り替えてあつた。持ちやすい大きさに丁寧に削られ、砂石で時間をかけて磨いたのでほとんどやわらかく感じるほどガドルの手のひらの中でしっくりときた。また、後ろの

方には美しい彫刻を施しところどころにガドルの守護星と同じ赤を基調にした小さな宝石のかけらを使って邪魔にならない程度に美しく配置してある。

丁寧は丁寧に扱われたことがわかるひとつひとつの道具にガドルは珍しくふつと笑みを浮かべ、マルスの頭を勢いよくゴツンと叩いた。地味に痛かった。

「丁寧に仕上げたこの持ち手の部分はわしの手によくなじむ。まあ、悪くない。だが、肝心の細工はまだまだこれからだな。」

普段は驚くほど繊細な細工を作り出すその拳はドワーフの例に漏れず力強く、少し涙目になったのは秘密だ。

「お前には教えることが沢山あるようだ。これからはもう少し直接教えてやることにしよう。」

マルスはそれを聞いて痛みも吹っ飛ぶほど喜んだ。

ガドルはまだまだとは言っていたが、マルスが細工し飾った工具をすぐに前のものと交換して使ってくれるようになった。

それからのマルスはガドルの指示を待つだけでなく、自分用に作った、まったく同じだが、少し飾りが質素な（マルスは自分の守護星の色、緑の石を控えめに使っていた）自分用の工具を使い、暇を見つければガドルの技を盗み、空いた時間にその技術を応用してできるだけたくさん作品を作るようにしてきた。

そうして、季節はまた何度もめぐり、マルスは才能あふれる細工師の若者としてだんだんと名が売れ始め、自分を指名する客もばちばち現れてきた。

ユルンの店でも、ガドルの作品と並んでマルスの作品も沢山おかれるようになった。

時々ガドルほどの作品を買うことができない若い女の子達が、ガドルほどの腕前はまだないとはいえガドルに鍛えられているマルスの、高価でない美しいアクセサリーを求めてやってくるようになったのだ。

マルス自身はガドルの唯一の弟子として恥ずかしくない作品がやっと思えるようになってきたとようやく感じるようになってきた。

母のテーノが、メイをつれてやってきたのはそんな頃だった。

第十五話 火の精霊

本来、メイが精霊の愛し子であることは、この世界にやってきたときに精霊の力で守られていただろうことからわかるように、もちろん良い面もある。

しかしメイ自身が自分の魔力をコントロールできない為に周りには低級の精霊しか近寄れない。その為、基本的に少し運がいい程度にしかメイに作用ができていない。これでは逆にメイへの危険が増えてしまっただけのようだ。

メイ本人に、彼女が精霊の愛し子であることを伝えることは大変重要であるとはゼノンにもテーノにも良くわかっていた。

言わないでもいいことは何もない。本人が魔力をうまく制御し、精霊をきちんと使役できるようにしないとこのままでは身の危険に繋がる。

日はとつぷりと暮れ、長歩きして疲れたのだろう、メイはちよつと眠たそうに目をこすっていたが、今日は大事な話がある。我慢して起きていてもらわないといけない。

三人は家に入り、キッチンにある木の年輪がそのまま意匠となっている分厚くがっしりしたテーブルに座っていた。表面はゼノンとテーノが結婚したところからもうずっと使われてきたので綺麗な飴色にいくつも細かな傷がついているがそれも味わいになっている。壁にかけられた ランプに灯された火がゆらゆらと影を作る。

テーノが淹れてくれたハーブティーを一口飲んでゼノンは何から切り出すか考えた。

この3ヶ月ほどの間に、言葉を教えると同時にこの世界で生活していくうえで必要とゼノンが判断したものはテーノと協力して殆ど教えてきた。

しかしそれらはドワーフ族の習慣をもとにしたもの。

テーノが中心に教えていたのは食べられる種類の植物の見分け方。初めてみた食物を毒がないかテストする方法、飲み水を確保するために水が安全かテストする方法、獣や鳥をわなにかけるやり方。食べ物の調理法、衣服の縫い方、修繕の仕方も教え込んだ。体がどう考えても同じ年頃である一族の子供たちよりも弱弱いメイをつれて森を歩いて、体力もつけさせてきた。

ゼノンも、文字の読み書きができるようになったメイに、この世界の地理を、どのような民族がどうやって暮らしているのかを教えたり、星や日、そして月の位置から距離、方角を読む方法を教えてあげていた。メイは自分でもゼノンの秘蔵の書物を許可をもらって読んだりできるまでになっていた。

さらには一般のドワーフ族は特に細かくは知ることはないのだが、ゼノンは賢者として、暦を読むことも仕事のひとつであった。

本来、メイにも教えるつもりはなかったのだが、彼女が月を毎日数えていたことから、彼女の世界では当たり前前に暦を読むことを知り、メイになれば理解できるであろうと教えることにしたのだ。

比べてみて面白かったのは一年の長さ。メイの世界地球では12ヶ月、365日で一年が巡るとか。ここでは地球と違い、一年が48日に及ぶこと、一年は16ヶ月。月は28日で一月とすること。季節は4つ。春夏秋冬それぞれ4ヶ月ごとに季節が変わること。ドワーフ族には時計の感覚がなく、一日を人間のように細かく分けていない。日が昇り、それから中天に昇るまでが午前中で日が落ちるまでを午後。日が昇ると起き、日が落ちると眠る。ドワーフ族は何千年もの間そういう暮らしをしていた。

また、村での買い物の仕方、通貨について。これらはまだ実際に村に連れて行ったことがないので、メイは実践では経験していないが、硬貨の見分け方と、ドワーフ族として最も大事なことが宝石であるそれぞれの輝石の価値の見分け方などを教えてあげた。

まだまだ教えたりないことはあるとは思っていたが、魔法について

は特に必要性を感じず、後回しにしていたことがここに来て問題となってしまった。

メイの癒しの魔法を受けたときの反応、また普段から精霊の干渉を少なからず受けているにも関わらず、まったく気にした様子がないこと、それに魔法に関しての質問を今まで一切ゼノンたちに聞いてきたことがないことから推察されることがある。

「メイ、お前はおそらく魔法が普通に存在していない世界からやってきたのではないかな。」

この世界では魔法は一般的に云うと良く使われている。エルフ族はいまだに精霊の愛し子がもつとも多く、精霊使いもそれに伴い多い。とはいえ、最近なぜか新たな精霊のいと子の数が随分減っていると聞く。これも最近の退廃ぶりが悪く影響しているのだろうか？

「もしも魔法が普通に意識に上るような生活環境からここに来ていたのならば、お前ならばおそらく魔法に関しても早いうちに質問をしていたらうね。」

「そうね。それにこれが私たち誉れあるドワーフ族でなければメイももつすでに魔法には触れることが生活の中であつたでしょうね。わたしらの中にいて普通に生活をしていたら魔法に触れることはまずないからね。」

メイは驚いて目をぱちくりさせた。『マホウ』？しらない単語。

「マホウ？」

「おや、魔法のことも話していなかったのかい？ まったくゼノンときたら。魔法は人間族にとって基本だろ？ きちんと教えておいてあげないとこの子が困るよ。」

メイが魔法についても知らないことを聞いてテーノは片眉をあげて感心しないといわんばかりのために大きくため息をついた。

「魔法は簡単に言うと、手足を使わずに頭と体内にある魔力を使って事象を起こすことをさういうんだよ。大きく分けて、精霊魔法、詠唱魔法、そして身体強化の3つの魔法が主なものだね」

ゼノンは苦笑すると、メイに魔法について説明することにした。

人間族は精霊の愛し子が出ることは大変少ない。その代わり呪文を使用する詠唱魔法は日常的に使わないもののほうが少ない。

たとえば料理に火の魔法や、水の魔法を使ったりといった程度の低レベルの物ではあるが。

そして、なんといっても「魔法使い」と呼ばれる輩たちはこの人間族のうちの魔法を得意とするものが特にそう呼ばれている。

魔法使いはその他の簡易魔法のみを使用できる一般の人間族と違い、攻撃的で、最近とみに中原に増えている魔物達との交戦時などに特に魔法を好んで使用する。

四足歩行の獣族は遺伝的に呪文を使う魔法を使えるものはいない。この種族は特殊で個体毎に差はあるとはいえ、自分ではコントロールできない身体能力強化の魔法がほぼ生まれたときからかかっていることが殆どだ。訓練をつめばこの強化魔法もコントロールが利くようになるが、他者に対してかけることはできない。

因みに人間族との混血である二足歩行の人型の獣族は人間族と同程度に詠唱魔法を使えるものも多いが、純粋な獣族と比べると身体

強化が劣る。

またすこし横道にそれるが、獣族と似て非なるものとして、聖獣、魔獣がある。

聖獣は、その名のとおり、聖なるものであり、聖なる力を持つているとされる伝説の獣。

魔獣は、その名のとおり、魔なるものであり、魔の力を持っている。これは伝説ではない獣。魔獣は魔物の一種で、獣の形態をしているものが魔獣と呼ばれている。最近はこちらほうと発見例が報告されており、近いうちにドワーフ族たちのすむこの森にも出てくることも考えられるので警戒が必要と言われている。

話は戻るが、人間族、エルフ族、獣族と違いドワーフ族は本来、魔法を使える種族ではあるのだが、普段の生活に魔法を使うことはほばない。使うのは魔力を秘めた石である魔石を加工するときと、鉱山での採掘時に地の魔法で空間を安全に確保することに一部のドワーフ族が魔法を使用する。

テーノは自分ではコントロールできない獣族は良いとして、たとえば料理等日常生活の為に、詠唱魔法を使用している人間族や精霊を使役しているエルフ族などを思い出していやそうに首を振った。

ドワーフからみたら、簡単に魔法を使用することは便利さに慣れすぎてしまいそうでおそろしい。魔法が万が一使えなくなったりなどに頼り切っていた反動がくるのではないかと考えただけ魔法を使わなくてもできることは自分でするようにしているのだ。

「『魔法』か。うん。そういう言葉はあるけれど、わたしの周りには普通になかった言葉だわ。聞いたことがあるのはお話しの中と、『ゲーム』の中。わたしは使えないし、使える人も知らなかった。」

『マホウ』を魔法だと認識したメイは今ゼノンとテーノに言われたことを頭の中で反芻してみたが、なぜ突然、ドワーフの中ではあまり必要とされないその『魔法』について、こんな時間に聞かせようとしているのか不思議に思った。

「実は、お前にきちんと話しておかないといけないと思ってね。」

ゼノンは、メイの考えを読んでいたかのようにそう言った。

「今日は、遠くまで歩いていったけど、あの大木のもとで、不思議な体験をしただろう？ あれは魔法の力なんだよ。」

ゼノンはあの場ではまだ考えがまとまっていなかったので、伝えていなかった事実をメイに伝えた。

「実はテーノとも話していたんだが、お前の周りには沢山の精霊が集まっていることに気づいたんだよ。お前は気がついていなかったかな？」

『セイレイ』？ また知らない単語。

「精霊は、そうだね、この世界の中で実体を持っていないけれど、どこにでもいるものだよ。ただ、その姿を見ることが稀なんだ。メイが感じた癒しの魔法は大木に宿っていた木の精霊の力だよ。」

「そうだよ、メイ。お前が来てから森の恵みを特に感じていたんだよ。あれもおそらく森の沢山の精霊の力だよ。それに庭に生えている草も、花々もどれも元気一杯だろう？ あれも精霊の力である魔法が作用してると思うよ。」

ゼノンとテーノは、メイに今まで見てきたそれぞれの精霊の力を説明した。

メイははじめは目を見開いて聞いていたが、そのうち思い当たることをいくつも聞いてなるほどと納得した。

メイにしてみれば異世界であるここでおきることは何もかもがそういうものだと思ってしまいがちだったため、もとの世界ならば不思議なことも子供らしい順応性の高さですっかり慣れてしまっていたことがいくつもあつたので特にもう気にしていなかったのだ。

「ほら、見てごらん。あのランプの光、ゆらゆら揺れてるね。でもちよつと面白いゆれ方だろう？じつと目を凝らしてごらん？お前にはきつと見えるさ」

テーノが少し嬉しそうにランプのほうを指差しながら言った。

なんだろう？メイはテーノが見てごらん、というからには何かが見えないといけないのだろうし、その前に「セイレイ」がどうとかつて言つてたので、話の流れ的にこれは「セイレイ」をさしてるんだらうなあ。

メイはそのままがんばつてじつと見ていたらなんだか目が痛くなつてきた。メイがぱちぱちと目を瞬かせるとちよつと目をつぶる一瞬前に何かが見えた。

「あれ？」

目を開けるとまた消えていた。

「むむ？」

気になる。すつごく気になる。

「なんかいるみたいだけど、目を瞑る直前しか見えないよ。目また開けたら消えちゃった。これがセイレイなんだよね？」

ゼノンはそれを聞いてにつこりと笑った。

「ああ。それでいいんだよ。見ようとすると見えない。見ていないときに見える。それが精霊なんだよ。私やテーノが見れるのは幼いときから訓練をしているから。われらドワーフ族は火の精霊と地の精霊と触れ合って、今の採掘技術や石の加工技術を磨いてきたからね。とはいっても多種族ほど彼ら精霊に依存はしてはいないのだよ。必要なこと以外には魔法は使わず、技術を磨く。それがドワーフ族のやり方だからね。」

「あの小さいのは私たちドワーフ族とは特に仲がいいやつらだから私も時々目にするけど、あんなに楽しそうにしているのは初めて見るよ。」

「精霊を見るためには、まずそこに精霊がいて自分で感じて認識することが大事だよ。」

メイは言われたとおりじつとランプのほうを目を凝らしながら見ていると何か動いたような気がした。それでもよくわからない。

ずっと見つめているのにちっともわからない。

テーノはそこに精霊がいるって言った。だからきつとそこに精霊はいるのに。

メイには見えない。何でだ？

何で見えないんだろう？わたしには無理なのかな？と残念に思いながらそれでも鼻がくつつきそうな位近寄ってじっと見ていたら突然火が大きくはぜ。

メイは思わずしりもちをついてしまった。

「びつくりした！あ！見える！なんだか見えるよ。小さい子がいるのが見える！」

驚いたことが良かったのか、突然精霊を目にすることができてメイが大喜びした。

「ハハハ。そのこは随分短気なようだね。メイがなかなか見えてくれないからこつちを見てくれと自分からサインを送ったんだよ。見ようとしても見えなかったのに、精霊が見てくれて言うて見えるようになるなんてなかなか珍しいね。」

メイはあまり褒められた気がせずなんだかちえつと唇を尖らしてみたがそれでも精霊が見れるようになった喜びには勝てなかった。

「一度精霊を認識したならばこれからはいつでも見れるようになるよ。特に精霊の存在を信じて見るのが一番大事だからね。」

ゼノンはそう言つてメイの頭をなでた。

メイはゼノンに頭をなでてもらうのが好きだ。パパを思い出す。ゼノンを見上げてうれしそうにメイは微笑んだ。

それにしても、本来、精霊を目にすることはかなり珍しい。魔力が高くとも精霊が見えるかどうかは相性があり、ドワーフや

エルフなどの妖精でも一部のものしか精霊を見ることは出来ない。

ゼノンたちはメイが精霊を見れるようになるだろうことは彼女が精霊の愛し子であることから特に問題はないだろうとは思っていたが、また同時に彼女は違う世界から来たこともあり、 　　もしや見えないこともあるかもしれないとも思っていた。

　　メイは初めてみたその精霊に興味を持ってもう一度ランプのほうまで近寄ってみた。

　　ランプの火の中に真っ赤な服を着た小さな小指の先ほどの女の子がくるくる踊っている。

　　彼女は火の精霊にふさわしい燃え立つような赤い火でできた髪の毛をうねらせている。顔立ちは、白目がなく真っ赤な目をしていてちよつと勝気そうに釣り目をしている。しかし目以外はあまり大きな特徴がない。そして体全体がぼんやりと光っている。

　　「その子は火の下級精霊だね。体も小さいし、あまりはつきりと姿が見えないね。」

　　テーノが興味深そうに精霊を見ているメイにそういった。

　　「なんだか精霊ってかわいいのね。あなたお名前は？」

　　メイがそう話しかけると火の精霊は不思議そうにメイを見つめ返してその後くるりと体を翻した。

　　「メイ、その子は下級精霊でもかなり下のほうだから思念波はつかえないし、精霊には個体としての意識はあまりないんだよ。だから彼らには名前はないんだ。」

　　ゼノンがそう説明した。

「名前ないの？それじゃ、英語だけど、私の世界の言葉でその服の色、スカーレットはどうか？」

「だめだ！メイ！」

「メイ！だめだよ！おまえ名付け親になっちまうよ！」

メイが名前をつけようとしていることに気づいて二人はあわてて止めようとしたが遅かった。

メイは二人のあわてぶりにきょとんとしていたが、あまりに二人があわてているので困ってしまった。

（『すかーれつと』？ナマエ？）

頭の中に響くように聞こえてきた声にメイが火の精霊のほうを振り向くと小指の先ほどの小ささだった彼女が今は手を広げた位の大きさにまで背が伸びている。

「え？大きくなったの？」

メイは驚いてゼノンたちに振り返った。

ゼノンとテーノも驚いてしまった。

「もう、あんなに成長してしまったわ！」

テーノが驚いてそうつぶやいた。

「困ったな。」

ゼノンはそういうと深く考え込んでしまった。

「わたし、悪いことしてしまったの?」

メイは二人の様子に困ったようにそういうと、火の精霊スカーレットを見た。

（ゴシユジンサマ、めい。ワルクナイ。すかれっと、めいダイスキ）

スカーレットはそう思念で伝えるとメイの肩の上に飛び乗った。スカーレットの真つ赤なドレスは先ほど布切れをただ巻いていたようなものだったの今はワンピースと違っていいつくりになっており、顔立ちも大分はつきりとしていて表情もわかるようになっていた。その上、すでに思念波まで使えるようになっていいる。

「メイ! やけどしちゃうよ!」

テーノは驚いてスカーレットを追い払おうとしたらスカーレットが怒って火の力を増して今にもテーノに襲い掛かろうとしていた。

「スカーレット、やめて! テーノはわたしの心配してくれただけだよ。テーノも、わたしは大丈夫だから。スカーレットはちっとも熱くないよ。」

実際スカーレットはメイにはまったく熱を感じさせなかった。テーノは疑わしそくにスカーレットを一瞥すると、恐る恐る手を近づけてみた。

「あつ!」

思わずテーノは大声を上げてしまった。少し手を近づけただけで、

やけどしそうにあつかった。

「テノ！」

「大丈夫か？」

ゼノンとメイはあわてて声をかけると片手を抑えながらもテノはにっこりと安心させるように微笑んだ。

「どうやら、ご主人様にのみ熱を感じさせないようだね。それにしてもこんな森の中でうっかりあちこちを焼いてしまわないように気をつけておくれよ」

メイがやはり大丈夫そうなのでそういった。

「ごめんね、テノ。でもどうして名前をつけるのそんなにいけないことなの？」

まだ子供のメイにしてみれば小さな精霊はかわいらしい人形のよくなもの。自分の人形に名前をつける感覚で簡単につけたのだが。

精霊はゼノンが言ったようにそのままでは個としての意識はない。全体の中の一部。火の精霊は火の精霊としての意識がなく、特に目的も何も感じていない。

ところが、名前を持ったとたん、精霊は個として独立しまう。

個となった精霊はもう全体の一部としての精霊には戻ることは出来ず、常に名付け親と共に行動をしなければ今度は個としての存在意義を失い、もう全体の一部に戻ることも出来ないまま消えてしまう。

名前をつけられてから、精霊は新たな生活を余儀なくされてしまうのだ。

また魔力を全体の一部として受け取ることが出来ないため、個となった精霊はそれから常には主人となった名付け親から魔力を供給してもらわないとこれまた消えてしまうことになるのだ。

つまり、メイはこれからこの小さな下級精霊を養うために魔力を常にあげないといけないことになる。

「だから、簡単に名付け親にはなっではいけないのだよ。お前は幸い『精霊の愛し子』と呼ばれる、精霊に好まれるものであったためにそれほど負担はかからないとは思うけど、無理に名付け親になつたりすると、自分の魔力を大半以上奪われて、日常生活に支障が出るものが殆どなんだよ。それ位、名付け親になることは自分の魔力を常に消費してしまうことになるのだからね。これから他に精霊を見ても簡単に名前をつけるのではないよ。」

メイは素直にうなずいた。下級とはいえ、精霊を養うための魔力の消耗は本来随分と激しいのだが、幸い精霊の愛し子であるメイは車とガソリンで言うところの燃費がよい器であり、このちっちゃな精霊を一人養う位実はなんともなかったが、メイには魔力をきちんとコントロールする力がない。このままでは上手にスカーレットに魔力を渡すことが出来ないかもしれない。ゼノンたちにしても前例を知らないので、慎重に越したことはない、と思っていたのだ。

「お前がきちんと自分の中の魔力を制御できるようになればいくらでもお前が世話が出来る範囲で名付け親になればよいが。今のままではおまえ自身にとっても危険だが、精霊たちにとっても危険になってしまうのだからね。」

ゼノンは内心、かなり驚いていた。

それにしても、精霊の愛し子とはすごい力だ。下級とはいえ、すっかり火の精霊を使役してしまったんだから。そのうえ、下級精

霊を名づけただけで思念波が使えるほどに成長させてしまった。

それにあの小さなスカーレットはもうすでにメイを守るためにいつでも魔法を使おうとしている。あの子の周りの危険を考えたらこれは良かったのだろうか……。

下級とはいえ精霊は本来かなりの力を秘めているはずではあるが……。

メイが魔力を制御できるように急がなければ。

第十六話 魔力

「ねえ、ゼノン、テーノ。わたしでも魔法つかえるようになれるかな？」

メイは今まで疑問に感じていたことを聞いてみた。目を期待いっぱいにきらきらと輝かせて二人を見つめている。すごくわくわくしているのが傍目からでもおかしいくらいよくわかった。彼女は物語の中で怖い魔法使いや魔女、それに妖精が魔法を使うのは知ってる。いつも本を読みながら自分もいつか魔法がつかえたらいいなっと夢見ていたのだ。

「うーん。私の目から見てもメイには十分魔力を感じるからね。訓練さえすれば魔法は使えるようになると思うよ」

テーノが少し複雑そうな様子でそういった。ドワーフ族のテーノにしてみれば魔法自体は珍しいものではないが、便利な道具のような感覚で使用する人間のようにには魔法を考えることはできない。必要に応じて魔法を使用するのと、日常生活で便利に使用するでは魔法のありがたみがまったく違う。そういう感覚の彼女からしてみれば魔法が使えるからといってそれほどわくわくとするほどのことは思えなかった。

「メイ、私たちは魔力は高いが魔法を普段から使うことはないのは知っているね。火の魔法と土の魔法に関しては訓練しただいで使えるようになるものも多いんだ。けどね、私らはあえて日常生活には魔法を使わないようにしている」

「どうして？」

メイが小首を傾げてそう聞いた。

「魔法は私たちの生活を少し楽にしてくれるありがたい力だけど、それに頼りきってしまうと今度は自分たちの本来の生活が大きく変わってしまうのさ。エルフや人間なんかは簡単に魔法を使って料理なんかしてるくらいさ。でも、料理が好きなお前ならわかるだろうけど、面倒がらずにひと手間かけたほうがおいしいものができるだろう?」

うん確かにそうかな。例えば……洗い炊きじゃなくて、きちんとお米を砥いだ後に水に十分つからせたほうがご飯がおいしいっていうように

「それに便利に慣れちゃ、味も素っ気もないもんしかそのうち作れなくなるようなもんさね。怠け者のやることさ」

便利か。現代の日本なんか便利なものばかりなんだけどな。まあ、電子レンジでご飯を炊くより、炊飯器で炊いたほうがおいしいし、それよりもさらにおばあちゃんところにあったかまどを使って炊いた古いお釜のご飯はさらにおいしいっていうみたいな感覚かなあ?

半年ほど前に母について海外にしばらくすんでいたとき炊飯器の代わりに電子レンジ用の容器でご飯を炊いていたときのことを思い出していた。きちんと炊けることは炊けるけど、味がなんか物足りなかったし、父方の祖母の田舎で昔ながらの釜で炊いたご飯は驚くほど大変だったけどすばらしく美味しかったことも。とはいえ、確かに美味しかったけど、メイはかまどをあえて用意して昔ながらのやり方で炊くのはさすがにやらないかななどとぼんやり考えていた。

圧力釜とかでおいしいのできるし。

じつとそのやり取りを聞いていたゼノンがメイが自分なりの経験で理解をしただろうことを感じて言葉を挟んだ。

「ともかく、魔法は使えるようになるだろうけど、その使い方はよく考えることだ。それよりも前にまずお前は魔力を制御する方法を学ばないといけないな」

「魔力の制御？どうして？わたし別に魔力が暴走してるとかっていうわけでもないんだよね？」

「お前の魔力は安定しているよ。それ自体は別段かまわないんだが、お前が『精霊の愛し子』であることが問題なんだ。精霊の力が近くにあるということはきちんと制御できていないとおまえ自身が外からの魔力の影響でひどい被害を受けてしまう恐れがあるんだ。外から受ける魔力もおまえがきちんと制御することで自分への影響を小さくすることができる」

「メイ、それからもうひとつ。精霊の名付け親になったことを人に知られないようにするんだよ。できたら、精霊を人目につかないようにしといたほうがいいね」

テーノが真顔でメイにそう言った。

「どうして？」

「そうだね……。さっき、精霊の名付け親となることは普通は魔力の消費が激しくてなるものはほとんどいないといったがね、それなのに名付け親として精霊を回りにおいてるものを他人が見たら

普通はどう思うと思うかい？」

「うーん。それなら『精霊の愛し子』なのかもって思っかな？」

メイはスカーレットを手のひらの上に乗せてじっと見つめながらそう答えた。

「そうだ。実は『精霊の愛し子』は最近ずいぶん危険な目にあっているらしいんだよ。」

「ああ。『精霊の愛し子』は人間族にはかなり低い確率でしか生まれることはないんだが、そのことを不思議に思う『魔法使い』が、なにやらずいぶんと愛し子を多種族からさらっているといううわさがあるんだよ。特にエルフ族には『精霊の愛し子』が多いからエルフの者がほとんどとは聞くがね。幸いと言っていいのか、我等ドワーフ族にはあまり『精霊の愛し子』は生まれることはないのだから、あまり問題視をしていなかったのだが……」

テーノに補足するようにゼノンがそのため息をつくように言った。

「お前のことが心配だよ。うっかり魔法使いどもに見つかってさらわれてしまったら……、お前みたいに可愛らしいのは何をされるかわかったもんじやない。いつも私たちがお前をみてやれるわけじゃない。そんなぼうつきれみたいに細っこい腕でどうやって立ち向かえるのか……おや、二の月があんなところにきてるよ。もうずいぶん夜も更けてしまったね。さあ、そろそろベッドに入ったほうがいいね。メイは名付け親になってしまったからには魔力制御を学ばないといけないということだよ。明日は早起きだ」

ゼノンに言われ、メイは眠そうにうなずくとスカーレットを左肩

に載せて、右手にはデディを持ってテーノに抱えられるように部屋に連れて行ってもらった。

第十六話 魔力（後書き）

あけましておめでとうございます。

いつも読んでくださっている皆様ありがとうございます。

今年もまたおつきあいいただけるとうれしいです。

ネット小説ランキング様より登録を解除いたしました。今までご投票下さった皆様、大変励みになりました。どうもありがとうございます。

第十七話 二人の心配

「それにしても、あの火の精霊の懐きようには驚いたな」

メイを寝かしつけた後、二人はまた先ほどのテーブルに戻ってハーブティーを飲んでいた。火の精霊は、ランプの光を消してしまったので、見えなくなってしまったが、メイのそばにいるのだろう。

テノは、先ほど眠そうなメイを抱えて部屋まで連れて行った時のことを思い出して、小さく笑った。

「どうしたんだい？」

ゼノンが聞く。

「いやね、私があの子を抱えて連れて行こうとしたら、はじめもうあの火の精霊が怒ってねえ。とはいえたいた力もない下級精霊にあの子を運べるはずもないし。メイが言い含めるまであの下級精霊は私を威嚇しっぱなしさ」

「ほお？」

「それで、私があの子をやっとベッドまで運んで、明かりを部屋につけないといけないと、それまで手がふさがって持ってこれなかった火種のことに気を回してる隙にさつさとあの下級精霊メイの部屋のランプに火をつけちゃって、ずいぶん勝ち誇った顔をしてくれたのさ」

テーノはまた思い出してくすくすと笑った。

ゼノンは、ドワーフ族と火の精霊の相性はいいとはいえ、このように感情というものを持った精霊の存在と向き合うことはなかったので興味が湧いた。あのスカーレットと名づけられた精霊は、もとそのような性格をしていたのだろうか？いや、個としての存在がないそれぞれの精霊に性格が備わっているとは思えない。ということは、名前をつけられたことによって自我が芽生え、性格が現れたのだろうか、と分析した。

「ふむ。精霊の自我の芽生え、か。興味深いな。あれはお前にやきもちを焼いていたのだな」

ゼノンもテーノに微笑んだ。

「それにしても、お前がさっき言ってたとおりあまりあの精霊の存在を知られるのはよくないな」

ゼノンは先ほどメイにテーノが言っていた事を考えるようにそういった。

ただ精霊の名付け親になるということは言ってみれば、精霊を見ることができる素養さえあれば誰にでもできることである。しかし、精霊の愛し子でもなければ精霊の名付け親となることは魔力の消費量が非常に激しいためこの世界では常識として精霊の愛し子でもなければほばなるものはいない。小さな子供でも危険だと知っているのだ。

ところで精霊の愛し子であることと、精霊の名づけ親であることは名前だけを聞くと正反対のように思える。しかし、実際は名付け『親』になったと言っても、精霊にとっては愛しい『子』であるのは変わらない。まるで親が子を愛し、守ろうとするように精霊は愛

し子を守ろうとする。名付け親になることはその絆がさらに双方向として強くなることだった。

ちなみに精霊使いとなるには、まず絶対条件として精霊の愛し子であることがあるが、それだけでは精霊使いにはなれない。愛し子が名づけ親となる、もしくはすでに名がある精霊の真名で精霊を縛ることを第二条件とする。名づけ親になった時点で精霊使いであると勘違いするものも多いが精霊使いになるにはさらに条件がある。とはいえ、精霊の名づけ親であることと精霊使いの違いは、どちらも精霊を使役しているには変わらないが、前者が受身で精霊の恩恵を受けるのに対して後者は精霊を使役して魔法を己の意思で発動させることができるもののことをいう。

メイは知らなかったとはいえ、名づけを行って、精霊使いになるための第一段階を終えてしまった。精霊使いになるためにはまずは名づけ、それにより、使役するための第二段階を終える。精霊の愛し子が名付け親になる場合は精霊のほうからの干渉により、名づけもスムーズに行われることがほとんどだが、そうでない場合は自身の魔力の負担が大きすぎ、苦痛も伴う。その上、精霊自身が干渉されることを恒常的に嫌がるためかなりの負担の割りに得るものはない。このことが精霊使いには精霊の愛し子であることが絶対条件になっているのだ。

「そうだね、それに周りにはあの火の精霊だけではない。あれだけの精霊を周りにおいておくのはあの子にとって危険だね。最近エルフ共が、金ほしさに精霊の愛し子を攫って魔法使いどもに売りつけているなどという不穏なうわさも聞いているしな」

ゼノンは最近聞いた嫌なうわさに眉根をよせた。

「なんだい、それ、本当なのかい？まさかエルフ族がそこまで堕ちてしまっているとはねえ」

テーノはそういつてこれまた嫌そうに頭を振った。それから落ちて着くように新しく淹れたハーブティーを一口飲んだ。

「メイのことがあの魔法使いどもにばれないようにしなければいけない。もちろん、エルフどもに見つかるわけにもいかないな」

メイの魔力制御をなんとかしないといけない。幸いメイはまだ幼い子供なので、制御の方法を学ぶのも問題ないだろうが、それでも少なくとも数ヶ月は訓練をしないと初步の制御もできないだろう。あの火の精霊を使役する必要がないならばゆつくりと時間もかけてもよいだろうが、魔力制御をしていないまま精霊とともにいるのは魔力の循環がうまくいかずにメイにとって非常にきけんだ。

「そういえば、今日二人が帰ってきた後、森のほうから嫌な気配がしていたよ。なんだかじつと見られているみたいですぐに家に入っただけだね。あれはもしかや……」

テーノがふと思い出したようにそういうとゼノンは驚いて彼女を見返した。

「何だつて？……もしそれがエルフ、もしくは魔法使いであった時は厄介だな」

「メイは生まれた世界に帰る方法を図書館で調べたいと言って、トレーダーが次にいつ来るか聞いていたわね。まさかあの子、トレーダーと一緒にいて人間の国にいきたいわけではないわよね？」

テノは恐ろしそうに肩をすくめた。

いくら人間族とよく似た容姿であるとはいえ、この世界の人間族とメイは違うのだ。

それも人間族のうちの魔法使いどもは特に変わり者がほとんどでそのようなものにメイを預けることはまず考えられない。もしも人間の住む中原へいくならドワーフの信頼置けるものに任せるか、そうでなければ自分がついて行ってあげたい。

ほとんどの中原の魔法使いどもは研究を第一の目的として他人の、特に異種族の者たちの都合など一切考えていないのではないかというほど容赦がない。

最近のうわさでは特に精霊の愛し子達を各地から集めてきて、怪しい実験を繰り返し返し人間族の中にも精霊魔法を使えるものを増やそうと試みているようだ。

同じ人間族でもこのあたりにちよくやってきて比較的交流のあるトレーダーの話も聞いていても魔法使い共が随分と傲慢に振舞っている様子がわかる。

魔法使いどもにすれば中原を魔物たちから守っているのは自分たちだという思いがあるのかもしれないが、ここは中原ではないのだからその理論は通用しない。

しかし、もしメイが中原の人間族の国まで行きたいと言い出したら…。

あの小さい娘には身を守るすべはまったくといってないだろう。

「魔法使いに近づけることは危険だよ。あの利益優先のトレーダー達にも会わせないほうがいいんじゃないだろうかねえ？」

テノが心配そうにゼノンに聞く。ゼノンにしてもその考えには

賛成だが。今このままではメイには家に帰る方法が見つかることはまずないだろう。

人間族の国には大きな町がたくさんある。メイがいききたいといっていた本の沢山ある場所、図書館もある。ゼノンもまだ若いころには人間族の国まで旅をして、図書館も利用したことがある。そのためゼノンは自分の蔵書は一人が所持するにはおそらく世界でも有数というほどの量を誇るが、図書館の蔵書数には匹敵しないだろうことを良く知っていた。

調べ物があるならば、特に魔法に関しての調べ物ならば人間族の国だ。

それは良くわかっているが……。

「トレーダーはあまり信用できないとはいえ、もっとも新しい情報を持っていることも確かだ。メイにあわせるかはまだ置いておくとしても、最近何か変わったことがなかったかは聞いておいたほうがいいだろうね。もしも人間の国に行くとしたらなおさらにね」

ゼノンはふうつとため息をついた。

彼には自分が人間の国まで旅するには歳をとりすぎてしまっていることも、賢者としてドワーフの里から離れることもできないことも良くわかっていた。テーノにしても歳をとりすぎていることは同じであるし、彼女にしても身を守る術は殆どない。

「いや、トレーダーのことは今は置いておこう。大事なのはあの子の精霊の愛し子としてのあり方だよ。このままでは危険だけが増してしまうのは良くわかっている。うちに秘めた魔力を制御することができればあの子を守る精霊の力も増すだろう」

「制御の石がいるね」

第十八話 朝のひととき（前書き）

前々話、前話とサブタイトルを変更しました。

魔力制御についてなかなか思うように筆が進みません（いや、この場合タイピング？が進まないと書くべきか……）

第十八話 朝のひととき

ドワーフ族のベッドはメイが日本で眠っていたベッドとはちよつと違う。むき出しの洞窟の土の上に木枠をおいて枯れ草をたつぷり積み上げてその上に被せるように大きな獣の毛皮を敷いて毛皮をかぶって寝るのが一般的だ。メイがお世話になっているゼノン夫妻の家は森の中の家ではあるが、同じように草と毛皮で柔らかなベッドを作っているのだった。

枯れ草を一定の間隔で取り替えないといけないという難点はあるが、その苦勞を差し引いてもいつも気持ちよく眠れるこのベッドをメイはすっかり気に入っていた。テノがいつも選ぶ草はとってもよい香りがして丁寧に手入れされたふわふわの毛の毛皮も本当に気持ちがいい。

メイは気持ちよいベッドの中でいつものようにテディに手を伸ばして起きようと思っていたら、ふと自分の鼻先に何かいることに気づいてうつすらと目を開けた。

（オハヨ）

「……」

スカーレットがじつと自分の顔を覗いている。

「スカーレット！」

一気に昨日の晩のことを思い出してメイは思わずテディを取り落としてスカーレットをぎゅっと抱きしめた。テディが抗議するよう

な目をしている気がしたが今はスカーレットだ。

「おはよう、スカーレット」

メイは思わず抱きついたが、精霊というものにこれほど実体があるとはびっくりだ。テディみたいにやわらかくないが着せ替え人形ほど硬くもない。ちゃんと動いてしゃべって、抱きしめることもできて！まるでお人形さんみたいなのに！

乱暴にぎゅうつと抱きしめられてもスカーレットは抗議しない。

（オハヨウ、メイ）

昨晚寝る前に、ランプの明かりをつけてくれてから少しおしゃべりした。スカーレットは自我が生まれたばかりという意味ではまだまだ幼児のようなものといってよい精霊だ。思念波とはいえ言葉はまだまだ拙いがそれでも女の子のお友達ができてメイはとってもうれしかった。

「あ、今朝は寝坊しちゃったみたい。スカーレットありがとう」

窓の外を見るともう日が昇ってしばらくたっているようだ。メイは急いで服を着替えると、眠っている間にテーノが用意してくれていた洗顔用の桶で手早く身支度を整えて、柔らかな、ウサギに似た小型の動物のなめし皮で顔を拭いて軽やかな足取りで台所でまだ朝の準備をしているテーノのもとまで行った。テディはいつものように邪魔にならないよう背中バックパックとしてぶら下がっており、スカーレットもふふよとメイの周りを興味深そうに飛び回っている。彼女はテーノが火を使うときは大喜びで自分で火をつけて得意そうにしていた。おかげでいつも使う火打石も必要がなくてテーノ

も喜んでいた。どうやらテーノとも仲良くなったようでメイはうれしかった。

いつもどおり朝食はポリッジ。麦粥だ。はじめはメイは日本の朝御飯とは全然違うこの食事に少し戸惑ったが、体にもよくて蜂蜜とミルクをかけて食べるこの朝食はすっかり気に入っていた。このミルクは同じ森に住むヤルデさんのところで飼っている牛によく似た家畜の乳を毎朝ゼノンが散歩がてら分けてもらってくるのだ。

メイも何度かついていったが、メイの知っている地球の牛よりもずいぶん小さく半分ほどで赤茶色の毛並みでとっても可愛かった。牛までドワーフとあったサイズでメイは初めてみたときびっくりしたものだ。このトルという牛に似た動物はあちらこちらの家で一般的に買われている。牛乳ならぬ、トル乳の為に飼っているのだ。

美味しい朝食を食べて、後片付けを手伝った後、ゼノンが魔力制御のことを教えてくれることになっていた。

第十八話 朝のひとつき（後書き）

少しこの世界の日常を書いてみたくてこんな感じです。できるだけ、できるだけ矛盾が出てこないよう書いてますが、気づいた点がございましたら連絡いただけるとうれしいです。今回も少し短いですが次話の魔力制御、がんばってかいてますのでご容赦を……

第十九話 魔力制御の講義（前書き）

更新再開です。ペースまだ少し遅いですがどうぞよろしくお願いします。

第十九話 魔力制御の講義

朝のさわやかなすんだ空気の中、木漏れ日がきらきらと降り注いでいる。ゼノンが今日は書斎ではなく、庭に置いている二番目のきこりの息子が切り出して作ってくれたずっしりとした深みのある色のテーブルで魔力制御について教えてくれている。

今日は珍しくテーノも一緒だ。テーノは説明はゼノンに任せたのか、じつと聞いているだけである。二人分のハーブティーと、メイの為のさわやかな果汁の飲み物を用意したら少し離れたところで繕い物をすることにしたらしい。規則正しく動くテーノの針運びの音がかすかにゼノンの講義の向こう側で聞こえてくる。

「昨日話した『魔力制御』には道具を使用した外側からと、内側からの二種類の方法がある。まず、この魔力制御がお前にどうして必要かを説明するためにもう少し詳しく魔力について話してあげよう」

ゼノンはふと、ハーブティーを飲んでいた空のカップに水差しから水をいれ、持ち上げた。メイはおとなしくゼノンの前に座って聞いている。バックパックのままで背もたれで邪魔なデディは今はメイの左腕に抱えられていて、スカーレットはそれを意識してかメイの右肩の上あたりをふよふよ飛んでいる。

「魔力が制御されていない状態はいかなればこのように腕にある程度溜まった水のようなものだ。人によってその器の大きさの違いや、水の量の違いこそあるがね。そしてその器の水はそこにただあるだけでは風によって表面が多少揺らぐことがあるうとも、基本的にどこにも動かない。そこまではわかるね？」

ゼノンがメイの数倍は太い無骨な手にカップを持ってメイを確かめるように見た。こくんとうなづくメイ。

「外部からの干渉 魔力だが、それが精霊によってもたらされるのはその腕を激しく振るようなものだ」

ゼノンはそういいながら実際にカップを大きく動かした。中の水がそれにあわせてちゃぶんと揺れいくらかカップから零れ落ちた。テーノがちらと頭を上げてゼノンを見るが、特に大きくこぼれたわけでもないのを見てまた繕い物に意識を戻した。

「そうするとその腕の水はこぼれてしまう。つまり、精霊に干渉をされることがないならば、腕の水がこぼれることはないということとで、魔力制御できないからといって普段別に問題はないということだ。しかしお前は『精霊の愛し子』であり精霊からの干渉は避けられない」

ゼノンはそこで一旦言葉をきってからスカーレットを一瞥した。

「その上このスカーレットはお前に干渉しながら魔力を吸収しなければその存在が危うい。そこで、お前にはこの魔力制御が必要だというわけだ」

ゼノンがまたここまで理解できているかを確認するようにメイを覗き込んだので小さくうなずいた。

「これについては道具を使うことにより外からの干渉を、例えばこのように変えることができる」

ゼノンはそういいながら今度はカップを持った腕を大きく振り回

した。水は遠心力でこぼれない。

「水はこぼれない。お前は道具を使って外部からの魔力を震えるように動く力から、腕を回す力に変える。そのように制御することだ」

メイはじっと考えながら聞いていた。メイの周りをスカーレットが飛び回っている。

「これが外部からの魔力の制御。お前にはすでに精霊が干渉をし続けているのでこれでまず間に合わせないといけないんだ。だがね、これはお前が倒れてしまわないための応急処置に過ぎないんだ」

「干渉がこれ以上大きくなったら道具では足りないということ？」

「そうだね。もちろんそれもあるのだが……このようにカップを振り回しているとき、お前はどうかやって中の水を飲む？」

メイはゼノンに言われて怪訝そうにそのカップを見た。ぶんぶんとなるように太い腕を振るっているゼノンの手にあるカップの水を飲む？

ゼノンはメイの顔を見ながら彼女が理解できたかを確認した。メイは少し考えるようにうつむいていたが、ふと青い石の付いた首飾りを見て何かに気づいたようにうなずいた。

「地球と同じ？地球がくるくる回っていても、太陽をぐるぐる周っていても、地上では動いてる気がしないし、物はそこにじっと重力で止まってる」

メイはうまく気づくことができてひどく満足そうにうなずくのを、ゼノンは不思議そうに見ていた。

メイはいったい何を言っているんだ？「地球」というのはメイの住む世界の名前ではないのか？そこはぐるぐる回っている？

「そうか！だったら精霊がカップに座ることができたらカップと一緒に回る精霊はまるでとまってるみたいに中の水を飲むことができるもの。だったらわたしは精霊にカップに座る方法を教えてあげたらいいんだね」

混乱するゼノンをよそにメイは一人で納得していた。

ゼノンはメイがすっかり納得した様子なのが不思議だったが、理解できているのなら今はそれでよいと考えることは後回しにした。それにしても、てっきり「そんなこと、できないよ」といわれるのを想定して今の話の流れを持ってきたかっただけに肩透かしを食らったものだ。

「まあ、理解ができていたのならばよい。カップを振り回しているままのやり方ではカップの水を飲むことはできない。つまり、精霊はお前の魔力を吸収することができない。そこで精霊を訓練によりこの腕を振っているカップに着地できるようにするんだね。そうすれば精霊は好きなときに中の魔力を『静止』した状態で飲むことができるだろう。まあ、これはすべてたとえであって本当にぐるぐると回すわけでもないので実際はもうすこし複雑なのだがね」

ゼノンが目元に笑みを浮かべてそういった。

「まあ、それはおいといて、そのお前の精霊は生まれたばかりだ。

せめて中級程度の力と経験があれば自力で、カップにたどり着くことも可能だろうが、この子にはさすがに無理だろう。だからこの制御石による外部からの応急処置でお前を守りながら、おまえ自身の内部の魔力制御も行わないといけない。」

「内部から制御することで魔力を循環させ、さらにはその流れに乗せて体外からも魔力を取り込むことが可能になる。カップの中にある水のままではメイ、精霊が必要とする魔力をいつかは使い切ってしまうだろう」

「魔力は枯れてしまうの？確かスカーレットは私からしか魔力補給を行えないのよね？その元になるわたしの魔力が枯れちゃったらスカーレットはどうなるの？」

「そうなるとその小さな下級精霊は存在を保つことができなくなってしまうだろうね。」

メイは思わず息を呑んだ。メイはもうすっかり心を奪われてしまった可愛らしいスカーレットが消えてしまうかと考えただけで涙目になってしまった。スカーレットもよくわかっていないくせにメイのまねをして涙目でゼノンを見つめる。

「それならどうしたらいいの？内部の魔力制御ができるようになるまでもしわたしの魔力が枯れちゃったら……？」

ゼノンはそのメイと小精霊の無意識の愛らしい行動にどうしたものかと一瞬行動が止まってしまったが、向こうのテーノからの「メイを泣かせるんじゃないよ」という無言の抗議の視線を感じて苦笑いを浮かべた。

「そんなに心配をすることはないよ。そのときは原石のままの魔石を使えばいくらかは魔力の補充はできるだろうね。どこかでおまえ自身が魔力の補給をしなければいけなくなってしまう」

「だがね、今のお前の魔力はそれほどたいしたものではないが、血液が流れるようにお前の中を循環するようになればその魔力はお前に強力な力を引き寄せ守ってくれるだろう。魔力の制御ができるようになれば力の強い精霊もお前をうっかり壊してしまうこともないと、ともにあろうとしてくれるだろうからね」

「それじゃ、わたしはまず、外からの魔力制御を行いながら、徐々に内側の魔力制御もしていけないといけないということね？」

メイはゼノンの説明を聞いて少しかり魔力というものについてわかった気がするが、まだこれではどうすればいいのかまではわからない。

「魔力制御にはまず制御するための道具　制御石　が必要なんだ。これをうまく加工すれば外側からの制御を行える。また制御石を身につけることで内側の魔力制御にもずいぶん役に立つからね」

「制御石？どうしたら手に入るの？」

「制御石とは、魔物を討った後にたまに手に入れることができる魔石を加工した形の石の一種だ。魔石は輝石と並んで大変高価だが、魔力を持った魔石は特に魔法を使うものたちにとって重宝がられている。制御石は、基本的に魔力の流れをコントロールするのに役立つ石で、持っているだけで魔力の流れが滑らかになる」

第十九話 魔力制御の講義（後書き）

できるだけ読みやすくしようと心がけていますが
今回は説明文が多くて読みにくかったかもしれません。うまく伝わるようにかけていたらいいのですが……

第二十話 町へ行こう

メイとテーノは仲良く手をつないでドワーフ族の集落の中心地である大きな町まで歩いていった。日本の舗装された道になれたメイにはすでになんだか足を運んだこのほとんど獣道といってもいいようなむき出しの土の道はとて面白かった。あちこちからリスやウサギに似た小型の動物が時々顔を出していたり、色鮮やかな野生の花々がところどころ明るい日差し of 当たる場所に咲いている。

木々の陰はひんやりとしていて30分ほど歩いてきて暖かくなってきた体にはとても気持ちがいい。時々下級の風の精らしきかわいいつむじ風がメイに吹き付けているのも気持ちいいしどうやら歩くのが少し楽になってるみたいだ。ちょっぴり恩恵を受けているらしい。

メイは見えるようになった目で精霊をあちこちで見つけてうれしかった。スカーレットみたいなおしゃべりはできないみたいだけどあちらこちらで好意を含んだ目線を感じて、お友達ができたみたいで楽しいのだ。

今日はメイはテーノやゼノンがすごく興味を持って見ていたお出かけ用のかわいい革靴は今は履いていない。テーノがメイの足にあわせて皮から切り出して作ってくれた膝下までのブーツを今ははいている。歩くたびにゆれるかわいいビーズの飾りがとっても気に入っている。いつものように背中にはテディが、そして今日はテディの外側のポケットにこっそりとスカーレットがかくれていた。何があるかわからないのでスカーレットのことは内緒なのだ。

服装は、テーノがまた新しく仕立ててくれた赤く染めた柔らかな皮のチュニツクと、同素材の短めのスカートをはいている。テーノはなんでもないことのように言っていたが、この服を作るといふ工

程は、ただ買ってきた生地を型に合わせて切って縫うというだけではなく、素材の加工から自分でほとんど仕上げてしまうという恐ろしく手間がかかる方法でいつも新しい服や靴などを作ってもらった。メイはすごく感謝していた。

「ママだったらきつとすごく興味持っただろうな」

メイの母親は服のデザイナーだ。自分の小さな店も経営している。メイ自身も母親の影響で服飾には結構興味があつたので、テーノの驚くほど器用に動く手先をじっと見ているだけでため息が出るようだった。

「ん？どうしたんだい？もう足が疲れたのかい？」

テーノがメイの視線に気づいてやさしく微笑んだ。テーノはいつもやさしくメイを見守ってくれている。

「大丈夫。町までもう少しだよな？」

今日は朝ゼノンが詳しく話してくれていた魔力制御のために必要な制御石の調達のために町まで向かうことにしたのだ。普段テーノについて買出しに行くときや、洞窟で働く鉱夫のおじさんやお兄さんたちの食事を運ぶときにもこの道を通るのでこのあたりにもだいぶ慣れたが、今日は町外れのテーノたちの息子さんの一人のところまで行くのだ。メイはまだ息子さんたちには会ったことがない。

「ああ。もうそろそろ門が見えてくるだろうよ。ほれあそこに見えてきた」

テーノに促されて見ると確かに向こうのほうに大きな門が見える。

町は高価な石を扱う店が立ち並んでいるのでしつかりと外敵から守る為に大きな堀で囲まれており、東・西・南・北と一箇所ずつ大きな門が設置されている。メイ達能通过るのは東の門だ。東の門は特にエルフ族からの侵入を防ぐために魔法への防御に優れているらしいがメイにはいったいどう違っているのかよくわからない。

ちなみに北は鉱山へ、西は海岸線へ、南は人間族などが住む中原への道が続いており、それぞれの門はいつも屈強なドワーフの兵たちが昼夜を問わず守っている。

ドワーフ族でも体の大きな兵隊を見てメイはいつものことながらちよっぴり怖くなってテーノの手をぎゅっと握った。

「おやおや、メイはまだ兵隊さんが怖いのかい？」

テーノがやさしくそういいながら門番の兵士たちに目配せした。

「メイちゃん、こんにちは。怖がらないでよ。おじさんたちはメイちゃんたち一般人を悪いやつらから守るためにここに立ってるんだからね」

強面の門番の一人がメイに声をかけてきた。よく見たら以前通ったときにも立っていた兵隊さんみたいだ。

「メイちゃんって言うのかい？ そういえばテーノさんとここに人間の女の子が滞在してるってちよっと前にうわさになってたけどそのこかい？」

もう一人の若者の門番も興味深そうにメイを覗き込んできた。そうなるとメイはすっかり恥ずかしいのと人見知りでテーノの後ろにかくれてしまった。

「メイ、さあ、きちんと挨拶をしなさい」

テーノがそつと背中を押してくれた。

「……こんにちは」

少し声は普段より小さかったけれどきちんと挨拶をすることができた。門番たちもニコニコとほほえましそうに見てくれていた。

「メイ、ちょっとこの人たちに話があるから見えるところで遊んでくれるかい？すぐに終わるからね」

テーノがメイにそういつてメイを門の中の安全な場所を指差した。メイはこくりとうなずいて門をくぐって手近なところで腰を下ろして町の人並みを眺めることにした。

小人さんたちがたくさん歩いている。男の人たちはみんな長いひげを生やしており、人間と比べると少し大きめの頭と太い手足が特徴的だ。テーノが向こうで先ほどの門番と話をしているのが見える。

テーノはメイは少しはなれたところで人並みを楽しそうに観察しているのを見て安心してから門番の二人に向き合った。

「実はね、メイを狙っている魔法使いだかエルフだかがいるかも知れないんだ」

門番たちは驚いた。

「何だつてあんな細っこい人間の子供なんか狙うんだい？ いや、メイはもちろんかわいい、いいこだつてえのは知ってるがね」

テーノがぎろりとにらむのであわてて言い訳をする。

「お前さんたちを見込んで伝えとくけどあの子は精霊の愛し子でね。その狙ってるやつがこの町にもやつてくるかもしれないからしっかりと見張つてほしいんだよ。あの子は私らがいつもついて守ってるんだがね、変な情報があちこちに飛ぶといけない。まあ、念のためだね」

テーノがそういうと二人はなるほどとうなずいた。

「ああ、愛し子か。人間が愛し子とは珍しいんじゃないかい？ まあ人間族のことはよく知らないがね。でもそれならあの子はやっぱり危険だろうね。よしわかった。わしらもほかの兵士たちにしっかりと見とくようにいっとくよ」

テーノは礼をしてすぐにメイの元まで歩いていった。

第二十一話 師匠と女の子（前書き）

今回は工房でのマルスから見たメイとの出会い場面。

第二十一話 師匠と女の子

その女の子はマルスがはじめてみる人間族の子供で、肩までのふわふわの巻き毛を揺らしてきらきらとした目でガドルとマルスの作る作品を眺めていた。師匠のガドルが“嬉しそうに”ひとつずつ説明している。

“嬉しそうに”？え？あの、師匠が？

背はドワーフ族としては少し高めの身長の師匠と比べると頭ひとつ分以上小さい。これが人間族でなければ年頃のドワーフの娘と大して変わらない位だろう。でもこの子は丸くて小さな耳の人間族だ。大人の人間族の身長から考えて、おそらくまだまだ成人に程遠い幼い少女なのだろう。マルスが普段見慣れている小さなドワーフの女の子と比べるとこの子は随分と背が高くて子供と呼ぶのには微妙に違和感を感じていた。

また体つきがドワーフの頑丈で骨太な体型と比べると随分と華奢なためある意味どこかエルフの娘に見えないこともないが、エルフの特徴的な葉っぱのような形の耳も持っていないし、華奢だといつてもやつらのように異常に感じるほど体が細すぎるわけでもない。

マルスは人間族にはトレーディングで来る商人たちに、細工師という仕事柄ずいぶんたくさんあったけれど、子供にあったのは初めてだった。

この子供、メイは母のテーノに連れられて師匠ガドルに会いに来たのだが、挨拶を済ませるともう工房のあちこちにある色とりどりの輝石や魔石、それを加工した細工物、その細工物を作る道具類などがどうやらかなり気に入ったようでうれしそうに見入っている。

それを見た師匠が、ぶつきらばうに少し言葉を添えてやると、うれしそうにその手をとって「じゃああれは？じゃあこれは？」とかわいらしく質問してすっかり懐いてしまったようだ。普段から気難しくて子供が怖がつて近寄ってこないのを実は寂しく思っていた師匠の心をあつという間にをつかんでしまった。師匠はそのことを知られるのが恥ずかしいのか顔は何とか威厳を保とうと厳しそうな顔をしているが、それでも嬉しそうに手を引いて質問をしてくるメイについつい頬が緩んでしまっている。

僕もメイが可愛らしい声で自分が作ったものに興味を持って質問をする様子には思わず頭をなでてあげたいような気持ちになるもんな。

「おやおや。さつきは兵隊さんが怖くて私の後ろに隠れていたのにガドルさんのことはすっかり気に入ったみたいだね。どうだい、可愛い子だろ？」

テーノがニコニコしながらメイとガドルの様子を見ているマルスに耳打ちした。マルスは突然話しかけられてびっくりしたけれど、確にかわいい子だとちょうど思っていたのでにっこりと微笑んでうなずいた。

「本当にかわいい子だね。このあたりでも人間の子供を父さんが森で拾って帰ってきたって最近うわさになってたみたいだけど。聞くのと見るのでは随分印象が違うね。」

「おや、噂になってるのかい？」

「ああ。やっぱりうわさどおり子供なのに背はすいぶん高いけど顔はやっぱり幼いからアンバランスな感じだね。父さんが拾ってな

かったらあつという間に森でくたばっちまってたんじゃないか、なんて言われてたからどんな貧弱そうな子供だろうと思ってただけだ。」

マルスはそういつて改めてメイを見た。

「まあ、確かにあの細さはなんだかすぐに壊れてしまいそうだし。なんだかほっとけない感じだな。それにしても、あの愛らしい笑顔。種族が違っても可愛いもんだね。」

テーノはいつも細工物のことばかり考えてるマルスが女の子のことに随分饒舌になっているのに少し驚いた。

「でもお前、この子はゼノンが言うにはついこないだまでまだ赤ん坊とっていいくらいの子供なんだからいくら成長の早い人間族だからって変な事考えるんじゃないよ。」

え！テーノが半分本気でそう口にしたのでマルスはかなり焦ってしまった。

「母さん！ひどいな僕はそんなつもりで見ていたわけじゃないよ……。人間族の子供を、それも女の子を見るの初めてだからびっくりしちゃったんだよ。確かにびっくりするほど可愛い子だけど、いくらなんでもそれはないよ！」

ドワーフの女の子達に人気があるのに女っ気がないこの三男は真っ赤になってすぐに否定した。テーノも別に本気でそんな風に思っていたわけじゃないのでただうぶなマルスの反応に微笑んだのだった。

「でも、あの子すごいね。師匠を怖がらない子初めてみたよ。それに師匠があんなふうに子供好きなのもちつとも知らなかったよ。大体師匠が近くに行くと小さな子供は普通すぐに泣き出しちゃうもんなあ」

マルスが気を取り直したように言った。

テーノはそれを聞くときくすくすと笑いながら「父さんだってあの子にもう夢中だよ。」と、マルスに言った。

マルスはいくらなんでもそれは母親の冗談だろうと思って母と同じようにくすくすと笑った。

「父さんが？まさか。父さんなんか、いつも本ばかり読んで他人に興味なさそうなのに。それも女の子に？」

テーノは同じような感想を息子に対して少し前に思ったことを思い出して似たもの親子なものね、などところそり思った。

「ああ。はじめはあの子の歳に見合わぬ賢さに興味を惹かれてたようだがね。あの子のいると知らずに笑顔になってしまうのさ。最近じゃ、いつもの穴倉の書斎から出て森を二人で散歩することも多いんだよ。」

くすくすと笑いながらテーノがいった。

マルスがあまり信じてないようなのでテーノは先日、大木のある森の奥から帰ってきたときのゼノンとメイの仲睦まじい様子を話すとマルスは目を丸くして驚いていた。

そして、自分が仕立てた可愛らしい服を着ているメイをほほえましそうに見ながらそう語るテーノの様子にメイが母のことももちろ

んすつかり骨抜きにしまっているようだと気づいた。

「そういえば母さんも僕らが出て行ってから随分寂しそうだったけど、なんだかとても楽しそうにしてるな。これもメイがそばにいてくれるおかげなのかな？」

マルスは両親がこの小さな女の子の存在に随分と心を慰められている様子なのがうれしかった。

「ガドルさんも随分メイのこと気に入ってくれてるようで丁寧に説明してくれてるね。あら、どうやら話もひと段落ついたみたいだよ。」

テーノは話が一段落したようなのでガドルに話しかけた。

「ガドルさん、どうですか？」

ガドルはテーノを手招いた。

「頭のいい子だね。一を聞いて十を知る。」

「そうですね。ゼノンもずいぶん感心してるんですよ。」

テーノがうれしそうに答える。

「それにしても初めてだよ。テーノに聞いてなきや気づかない程度の力だけど、いやぁ驚いたね。こんなに沢山の種類の精霊が一箇所にいるとはね。」

ガドルは心配そうに眉根を寄せた。

「これは気をつけたほうがいいよ。最近では精霊の愛し子はすくなくなってきたから見つかる厄介だ。うっかりしていると売り飛ばされてしまいかねないよ。」

ガドルが声を落としてメイに聞こえないようにささやいた。これはテーノ達も心配していることでもあった。

「そうなんだよ。それもあってね、今日は伺ったんだけどさ。」

ガドルが片眉をあげ、続きを促した。

「メイ、こっちにおいで。」

第二十一話 師匠と女の子（後書き）

もう少し工房でのお話続きます。

第二十二話 小さな耳飾り

「さあ、メイこつちにおいで」

テノに呼びかけられてメイは少し名残惜しそうに手にとって見ていたきらきらと輝く石がたくさん付いた首飾りを大事に置くと、とことと大人たちのもとまでやってきた。

「メイ、今日はなんでこちらにお邪魔することになったのか今話してたところだよ。さあ、ガドルさんにお前の精霊を見せてあげるんだよ」

テノに言われてメイはこくんとわずいて、バックパックの形で背負っているデディから出てくるようにスカーレットにそうと呼びかけた。

「……」

スカーレットは少し警戒するようにちょっとだけ顔を出してメイの顔を見た。メイがこくんとわずくと、しぶしぶといった感じでメイの肩に登って腰掛けた。

「火の精霊のスカーレットです。私のお友達になってくれたの」

メイがそういってスカーレットの頭をなでると気持ちよさそうに手に擦り寄ってきた。

「そう、お友達か。それはいいな。火の精霊よ、メイのことをよく守ってやってくれ」

ガドルがそう目を細めて言うと、スカーレットはつんと口を尖らせ腕を組んでそんなことは当然だと念話を送った。

「お？念話ができる下級精霊とは。なかなか優秀なようだな」

ガドルはそういうと、ふむとうなずいた。そうしてしばらく考えるようにスカーレットを見つめていたがくるりときびすを返して奥の倉庫のほうに行ってしまった。メイがだんだん心配になってきたころガドルは何か小さなものをいくつか手にもって戻ってきた。

「ほら、これをつけてごらん」

ガドルがメイに手渡したのは小さな耳飾りだった。透明な石がひとつ付いただけのシンプルなものだ。マルスはそれを見て驚いた顔をしている。

「ガドルさん、でも、私、耳には穴を開けてないから……」

メイが困ったようにその耳飾りをみながらいうと、「穴？」そういつて一瞬ガドルはきよとした顔をしてテーノをみた。

「メイ、こうするのよ」

テーノが心得たようにガドルから耳飾りを受け取りメイに見せてから耳に近づけるとピアスホールもないのにぴたりと耳にくっついた。耳飾りには針に当たる部分がなかったのだ。いわゆる磁石で出来たもののようにぴたりと耳にくっついてもう離れない。キャッチの部分もないがまったく落ちる気配はなかった。

「え？あれ？これはどうやってくつつくの？」

メイが不思議に思っただけでそう聞くとガドルもマルスもびっくりしたようにメイを見た。

「お前は今まで耳飾りを見たことがないのか？」

メイは意味がわからない。耳飾り、そうもちろんイヤリングはママがいつもつけていたし、見たことはある。だけど自分が知ってるものは耳に穴を開けてそこに通すものいわゆるピアスタイプのものか、もしくは連結した金具部分を後ろで固定して使うものやクリップオンタイプのものしか知らないというふたりはずいぶん驚いていた。

テーノはそれを聞いてこの話はゼノンにしてあげないと、と心の中でつぶやいてからメイを見た。メイの世界の技術力はすごい。手の込んだ作業をしないとそのような細かいものはできないだろうと感心する。だが単純にそのような方法で耳につけるとというのが驚きだ。ピアスタイプは聞いただけで耳が痛くなっちゃう。こりゃ魔法を使わない技術というのもいいものばかりではないようだね。

「これはね、魔力を帯びた石なんだよ。体内の魔力と石の魔力が上手にくつつきあうからこうやって落ちないんだよ」

異世界からやってきたというメイとはいくつかやはり文化的、技術的に違うものがあるって当然なのだ。だからこうやって説明をすることはテーノにとっては当然のことだったのだがガドルたちにしてみればなぜそんな基本的なことを説明してるのかとなる。

「この子はね、魔法を使わない場所からやってきたらしいんだよ。」

だから、魔法に関することはゼノンと二人少しずつ教えてあげてるんだがね、私らにしたら常識的に知ってるだろうってこともあるからさ。魔力石についてはまだほとんど教えちゃいなかったんだよ」

「ふむ。魔法を使わない場所か。いったいどんな場所なんだろうな。まあよいよ。とにかくメイは魔法に関してほとんど知らないということだね」

ガドルはそういうとメイにあげた耳飾りにそつと触れてそれからスカーレットを見た。

「お前にはこれだ」

ガドルは赤に光るごつごつした石をひとつスカーレットに差し出すと、彼女は驚いたようにそれを見てあわてて受け取った。ガドルを見て真っ赤になりながらありがとうと思念をおくり、スカーレットはぱくりとその石を口に含むとそのままくんと飲み込んだ。

メイはその様子にひどく驚いて、スカーレットを見てそれからガドルへどうということかと目を移した。

「どうだい、火の精霊よ。少しは楽になったんじゃないか？」

スカーレットがうれしそうに自分の体をみてそれからにつこり微笑んだ。スカーレットの体が今までよりも少し鮮やかになっているが傍目にもわかった。

「え？本当に？スカーレット楽になったの？からだ辛かったの？」

メイが心配そうにスカーレットを見ながらそういうと、今までじ

つと聞いていたマルスがにつこり笑ってメイの頭をなでた。

「そうだよ。メイはもう父さんから精霊は特に下級精霊は名付け親から魔力をもらわないと実体を維持できないというのは聞いているかな？そう、良かった。今師匠がスカーレットにあげたのは魔石の原石のかけらだよ。魔力が特にこの赤い石は炎の魔力を純粋な形でもっているから君の精霊もすなりと受け取ることができたんだ」
マルスがそう説明するとメイはほっと胸をなでおろした。

「それじゃ、もうスカーレットは大丈夫なの？」

可愛らしく首をかしげるメイにガドルの頬が緩んだが、弟子が見ているのに気づいてこほんといとつ咳払いをしてからメイに向かった。

「ああ。今マルスの言ったとおり、お前の精霊はすこーしばかり魔力不足をおこしておったからな。お前がさつさと魔力制御を覚えんことにはこの子は恐ろしくてお前の魔力を吸収しすぎてしまうかもと躊躇しとつたんだろうよ。だがな今うちにあつた魔石のかけらを飲ませてやった。これで少しは持つだろう。お前ががんばって修行して魔力制御がじぶんで出来るようになればまあ、これからは石はいらんだろうが」

そういつてガドルはもう少し持っていた魔石のかけらをメイに渡した。

「まあ、それまではこれではらを足してあげるとよい。だがお前の魔力がこもったわけではないから、その精霊にとってはあまりうまくいもんでもない。できるだけ急いで制御できるようにしてあげるんだ」

ガドルはそういつて大きくて傷だらけの手をぼんとメイの頭にのせてやさしくなでてやった。メイが気持ちよさそうに目を閉じてすこしくすぐったそうにしているのを見てマルスはなんとなく自分に注意を向けたくて思いつくまま声をだした。

「ああ、その師匠がメイに贈ったこの耳飾りは魔力制御の力を持つ魔石を使っているからメイの魔力を体内でうまく流すのに一役買っているんだよ。だから君の精霊は君の生のままで荒削りな魔力の流れに翻弄されることなくったんだ。少しずつ慣れていけば自分でその流れを調節してこの子に魔力をきちんと渡してあげられるようになるはずだよ。とりあえず持っているだけでも君にとっても体が少し楽になったと思うがどうか？」

メイが目を開けてマルスのほうを向いたのを師匠がちよつと物足りなさそうにしていたが。

「あ、本当だ！なんか不思議な感じ。少しからだが軽くなった気がする」

メイがくるくる回りながらそう言ったのを聞いてガドルはまたうれしそうに微笑んだ。

「そうか。役に立ってよかったよ。それはそこにいるマルスが先日しとめた魔物からとった魔石で作った制御石。制御石への加工は私でしたが、その形に整えて耳飾りにしつらえたのは実はマルスだ。練習作として作らせたのだからなかなか良いものができたのだ。お前が使ってくれると良いだろう」

メイはそれを聞いてガドルとマルスに可愛らしくぴよこんと頭を

下げてお礼を言った。その瞬間にデディが背中でのその存在を主張するように頭のほうにずれてきてテーノも含めて三人は笑ってしまった。

第二十二話 小さな耳飾り（後書き）

大変お待たせしました。感想を下さった皆さんどうもありがとうございます。家族が増え、毎日忙しくすごしていましたのでなかなか更新できず申し訳ないです。

これからも少しずつ更新していきますのでどうぞよろしくお願いします。

第二十三話 狩り仲間（前書き）

お久しぶりです。

いつも読んでくれてありがとうございます。

第二十三話 狩り仲間

「マルス、お前も知らないうちに魔物退治なんかできるようになったんだねえ」

テーノが先ほどのガドルの話を聞いてしみじみとそういうと、マルスは少し恥ずかしそうに笑った。

「母さん、僕だっていつまでもまだ母さんたちと暮らしてた頃の幼いままじゃないんだし。このあたりの魔物退治くらい誉れ高きドワーフ族として当たり前だよ」

「いやいや、このマルスなかなかその方面でも筋が良くてな。私も最近は魔石が前より手に入りやすくなって細工もいいものが出来るようになってきたんだ」

ガドルが珍しくマルスをほめたのでマルスはまた恥ずかしくなっていました。

「師匠もやめてくださいよ。ほめるのは出来たら細工物の仕事でほめてもらいたいなあ」

「細工のほうは、まだ修行がいるな」

ガドルがにやにやと笑いながらそういうと、テーノとメイが笑った。マルスはそれで余計恥かしくなって赤面しているのをちらりとメイは不思議そうに見た後、ふと気づいたように聞いた。

「マルスはどうやって魔物を退治するの？魔物ってまだ私見たこ

とはないんだけど、このあたりもたくさんいるの？」

マルスは話題を変えてくれたメイに感謝してにっこり微笑んだ。

「このあたりにはあまり魔物はいないよ。僕が狩りに行くのはここから少し離れたもつと中原よりのほうなんだ。僕はいつもこの横弓と槌を使うんだ。横弓はまあ、それなりの飛距離もでるし安全に狩りをするのに必須だけど、特に僕が狙ってる獲物をしとめるにはこの槌が有効だね。大きく振りかぶるから、もししとめ損ねたら隙がでて危ないんだけど、当たればかなりの威力があるからね。だいたい一、二撃でしとめることができるよ」

マルスは壁に立てかけている自分の身長と代わらないくらい大きな槌を指差して言ってからこんなことは小さな女の子に言うべきじやなかったかと少し後悔しながらメイを見るとメイは真剣な表情でその武器を見ていた。メイはこの世界が自分の住んでいた世界と違うことを知ったときからずっとこの住み慣れたドワーフの集落をいつかは離れないといけないことを知っていた。このままここにいても帰れる見込みはないと思われるから。だから、旅をすることがどれだけ危険か知りたい。魔物ってどんな生き物なのだろう。どうやって安全に旅をしたらいいのだろう。自分も武器を持って戦わないといけないだろうか……

「これ、『槌』っていうの？とっても大きくて重たそうだね……柄の部分が木で頭部はこれはなんかの石かな？持ってみてもいい？」

メイがそういつて槌に手を触れそうになるのをすんでとめると

「あぶないよ。落としたら君ペツちゃんになっちゃうよ。これの頭部はかなり硬い特殊な鉱石で出来てるんだ。見た目どおり本当

に重いからね。君の細腕だったら持ち上げられないから。ドワーフ族並みに力がないと難しいと思うよ」

マルスはそういつて、ゆっくりと槌を差し出した。

「さあ、僕が支えてあげるから持つてみてごらん」

マルスに支えてもらいながらその木槌を持ち上げようとするが、メイがどれだけがんばっても槌は持ち上がらなかった。メイの身長よりもさらに長くてヘッドの部分もずいぶん大きいので仕方がない。

「マルス、今日は久しぶりに新鮮な肉が食べたいな」

ガドルがにやりと笑ってそういつた。

「そろそろトータウルが群れで移動する頃だろう」

テーノもそういつてマルスを見た。

「……わかったよ。トータウルなら一人では難しいな。ちょっと仲間を連れてくるから待つてて」

マルスには二人が言いたいことはよくわかっていた。トータウスの肉はゼノンの好物だ。せっかく魔石狩りの為に磨いた狩りの腕だが、たまには親孝行、師匠孝行するのも大事だしな……それに、母さんも久しぶりに大きな獲物を取りたいんだろうなあ……そんなことを思いながら、トータウル狩りをする為に友人を数人誘う為に出て行った。ガドルはマルスが出て行ったのを確認してからゆっくりしていつてくれといつて茶をふるまってくれた後急ぎの仕事がまだ

残っているので失礼するよと断って工房に戻った。

「テーノ、トータウルって何？」

メイがお茶を飲めないのでりんごのような実をテーノに剥いたもらって食べながら不思議そうにそう聞いた。テーノの説明を聞いていると、どうやらこの世界ではもっともポピュラーなタイプの大型の食肉用に狩られる魔物らしい。メイは魔物が食べ物だとはちっとも知らなかったという、魔力を体内に秘めている動物が魔物と呼ばれているので、魔力がないものと別段肉は変わらないと聞いてびっくりした。どちらかというと、魔力を少し含んだ肉の為、魔力の補充にもいいらしく特に魔力を消費した後には好まれるらしい。というか、メイもいままで結構いろんな種類の魔物の肉を夕食に食べたという聞いてさらに驚いた。いったいどれが魔物だったんだろう……？

そうこうしているうちにマルスが3人の同じくらいの年頃の若者を連れて帰ってきた。一人はマルスと同じくらいの背の高さの若者で大きな槍を持っていた。もう一人は少し大柄に見える若者で背中にやはり槍を背負って大きな台車をひいていた。そして三人目は意外なことにはほっそりとした女の子で背中には弓矢を背負っていた。

「テーノおば様お久しぶりです」

女の子がそういつて微笑むとテーノが驚いたように彼女を見た。

「あらあら、本当に久しぶりだね。ユルンじゃないかい。見ない間にまた一段と美人になったねえ。アルナの若い時分にそっくりだ。それから、お前さんたちはデミタにクルトじゃないか。大きくなっただねえ」

「おばさん、お久しぶりです」

「よく覚えてましたね。本当お久しぶりです」

テーノはユルンに話しかけた後、横にいた二人の若者にも微笑んだ。同じ集落に住むすべてのドワーフはみなよく知っている。デミタは体格がマルスとあまり変わらない方の若者で、以前に一度、ガドルに弟子入りしたくてこの工房で断られたこともあるが、今ではマルスともよいライバル関係となり細工の腕を競い合っている仲だ。魔石を採る時にはお互い協力して狩りをすることもよくあり、今回も魔石調達に一緒に行こうと誘われたのだ。クルトはデミタと同じ工房で働くデミタの弟弟子に当たる若者で、デミタが行くところどこにでもついてくるのだが、実はユルンに気があるらしく、この三人が狩りをするときにはデミタをだしについてくるのだ。まだまだ狩りの腕も細工の腕も頼りないが体は一番大きく力もあるので運搬係として役に立ってってくれている。因みにマルスにはすでに巣立った兄弟子はいても、弟弟子はまだいない。ガドルがなかなか採用しないからだ。

「紹介するね。この子は母さんたちが預かってる人間の子供でメイって言うんだ」

「ああ、可愛い子だろ。ゼノンもこの子をずいぶん可愛がってるんだよ。さあ、メイ皆さんに挨拶するんだよ」

マルスとテーノに促されてメイが一步前にでた。ちょっとこわそうかなと思った大柄の若者も含めてみんなメイを見てにっこりと微笑んでくれたのでメイも少し安心して笑いかけた。

「初めまして、メイといいます」

ぴよこんとお辞儀するのを、習慣が違うのか不思議そうに一瞬見

てから同じように三人も頭を下げた。文化の違いが面白いと感じたみたいだ。

「メイ、よろしくね。私はユルンよ。あなたのことこのあたりでも噂になってたのよ。人間の女の子なんて見たことない人ばかりだからね」

ユルンがそういつて、メイに近づいてきゅっと抱きしめた。

「うゝん、可愛いわゝ」

小物などを扱う店で働くユルンはかわいいものは何でも好きなのだ。可愛い女の子ももちろんダイスキだ。

綺麗なお姉さんに抱きしめられてメイはちよつと赤くなつたが、悪い気はしなかつたので、というか、両親がいないのでこつやつて抱きしめられるとちよつと安心するのでメイも抱きしめ返した。初対面なんだけど、このドワーフのお姉さんはふんわりと優しい雰囲気だ。メイもあつという間に打ち解けてしまった。ゼノンとテーノという年代の離れた人しか回りにいなかったので余計に年が比較的近いだろうと思われるまだ若いドワーフのお姉さんがいることがうれしいのだ。メイの知るところではないが、ドワーフの少女なので実年齢は遥かに上である。人間で言うところの16、7歳程度であるといつておこつ。

第二十三話 狩り仲間（後書き）

皆さんもし違和感や誤字、脱字などに気づいたときはお知らせいただけるとうれしいです。

第二十四話 巨大な魔物トータウル（前書き）

更新遅くなって本当にごめんなさい。

応援してくださっている皆様、拙作をお気に入り登録してくださっている皆様、お待たせいたしました。

第二十四話 巨大な魔物トータウル

メイは大型の魔物というものを見たいと思った。そう言う、危ないので駄目だと言われた。

「……どうしても、駄目ですか？」

「あんな、賢者様のところの客だからって何でも思い通りになると思うなよ。お前みたいな貧相なチビが付いてきても何の役にも立たないどころか足手まといになるに決まっているだろう」

クルトはメイのような弱弱しくて小さな子供はついてくるべきではないとかなりはつきりと反対を示した。メイは別段人間の子供としては細すぎるわけでもないのだが、彼らにとつて見慣れたドワーフの子供達のような頑健な体でないことは彼女の少し触れただけで壊れてしまいそうな外見を余計強調しているのだ。だからクルトはこのいかにも体力のなさそうなよそ者の人間族の子供などが付いてきて一行の行動を制限するのは迷惑だと思って反対していた。

「おい、クルト！」

「ちよつとクルトったら！」

マルスと、そしてユルンが珍しく声を荒げてクルトに抗議した。メイはクルトのようにきつい物言いはこちらに来てこの方まったくされたことがなかったので大きな目を縁取る長いまつげがふるふると震えて、今にも泣きそうな顔をしていたからだ。

「今のは誇り高きドワーフ族の若者としてあるまじき配慮に欠けた言葉遣いだ。お前はもっとそういうところを直すべきだと思うぞ」

マルスはどうでもいいのだが兄弟子のデミタにそう言われ、その上憧れのユルンにまで睨まれてクルトはぐっと押し黙った。

「まあ、待ちなよ。確かに配慮には欠けてたかもしれないがクルトの言うことだって一理あるからね。メイだってちよつとびつくりしただけさ。な？メイ、そうだろう？」

テーノはそういつてメイの顔を覗きこんだ。

確かに、久しぶりに聞いたきつい物言いにびつくりしただけだ。メイにしてみればそういうわれて当たり前のことなのだから。体がずつと細いことも、同じくらいの背丈のドワーフと比べてメイが格段に力が劣ることは前から知っていた。

メイは東京の両親の元に帰りたいとずっと思っているが帰り方がまったくわからない。ドワーフ族でもっとも知恵も知識もある賢者のゼノンでさえ異世界については知らなかった。ゼノンがいうには実際にみてみないとわからないらしいが、人間族の住む中原にある大きな図書館ならば何か助けになる書物があるかもしれないということだ。そうでなくてもよく似た種族であるだろう人間族には会ってみたいと思っていた。彼らの中には魔法使いと呼ばれるものたちもいるとゼノンに教わってメイは知っていた。彼らならもしかしたドワーフの賢者が知らないこともなにか知っているかもしれない。だからメイはいつか旅にでないといけないと思っていた。そのためにはこの世界の魔物とも向き合えないといけないときがくるはずだとわかっていたからだ。なんとか方法を探す為にこの世界のことをできるだけよく知りたいのだ。

メイがどういえば皆にわかってもらえるだろうと考えていると驚

いたことに同じく反対すると思っていたテノと一緒にいくことに賛成してくれた。彼女の一言でメイもこの狩りのパーティーに参加できるようになったのだ。テノは別にメイがわがママを言っているわけではないことを知っていたし、彼女がやることを何でも許すように甘やかしていたわけではない。ドワーフの子供もドワーフたちにとって貴重な労働力だ。別段メイがついてくることは問題に思っていないかった。子供は狩りには参加できないが、大人が狩りをする様子を見て学ぶものだ。できるだけ危険に近づけないような心配りはするが大自然に生きるのに必要な力を付ける為にもこれは避けでは通れないと彼女は思っていたのだ。メイはドワーフ族ではないがこれまでテノを手伝って森での生活にも慣れてきている。テノはこの小さな頑張り屋のメイがずいぶん和我強く、賢くて、なんにでも一生懸命取り組むことをこのメンバーの中で唯一知っている人物だったのだから反対しなかった。せつかなので、メイでもできる手伝いをしてもらおうと思っていたし、大型の魔物についての知識が増えることも大切だと思っていた。

ドワーフの集落を囲む森を南東に向けて進むと、景色は唐突に変わる。そこまですつとあった緑の天蓋を抜け、メイが生まれ育った東京の晴れていてもいつも曇天のような空とは大違いの突き抜けるように青い大空が広がる草原地帯が拓けているのだ。メイは最近見慣れていた森の切れ間に見える空とは違い驚くほどのその大自然に子供ながら感動していた。

（すごいな。空がとっても近く感じて変な感じ）

東京もそうだが、テノたちの住む森も高い木がたくさん立ち並んでいるので、広場になっているところから見るとしても青空はほ

んの一部だ。

一行はその草原を横断するように流れる川に向けて歩いていった。川は集落の北の山脈から流れており、森を通りこの草原に流れるころにはずいぶんと大きな支流となっていた。中天に太陽が昇るまでにはいけそうなのでマルスはほっとした。メイを連れているのもあり、普段より移動に時間が多めにかかる予想したからだ。メイは驚くほど不満も言わず、しつかりと付いてきていたので助かった。クルトはそれでもなにかこれからメイがしでかすのではないかと不審の目を向けていた。

メイは遠くに見えてきた土煙の中を移動する巨大な魔物たちを見て息を呑んだ。大きな角が二本その額から牛のように生えており、もつとも大きなリーダーだと思しき一体はなかでもひととき大きく鋭く光るそれを誇らしげに掲げている。その長い角はおそらく、地球の象と変わらない位の体長よりもさらに長く黒光りしていた。体毛は黒。甲羅も光沢のある黒で、唯一、というか二つあるのだが、目は魔物特有の赤い色をしていた。

トータウルは普段は割りとはばらばらに生活をしているのだが春から夏にかけてのこの時期のみ集団でこの草原の水場を求めて移動してくる。丁度赤ん坊が生まれる時期だからだ。一体一体も硬いような体でできている為、そう弱い魔物ではないのだが、赤ん坊が生まれてくると種の保存の為、彼らは種族全体で弱い立場の赤ん坊と、出産で弱った母親達を守るために集団になるのだ。あまり高品質の魔石は取れないが、肉が大変柔らかくて美味しい為、どの種族も好んでこの魔物を狩る。この地帯はドワーフ族の領土の為、人間族の多い中原よりも豊富に獲物が残っている。人間族は自分の欲望のままに必要以上に魔物を狩る為に、このような有益な魔物も数が激減していると、テーノが歩きながらメイに教えてくれた。

「トータウルはあまり足が速くないのね。大きな甲羅のせいかな？」

メイははじめてみる大きな魔物をじつと観察していた。平原には遠くのものも入れると5つほど群れがあるが、一番近くに見える群れは数えて33頭。先頭をリーダーと思われる巨大な角の雄が走り、少し間をおいてその後を14頭の小さな、とはいえ一メートルはあるだろう角を持つメスのグループが子牛を連れている。母牛達に混じって子牛は全部で6頭一生懸命走っているのが見える。そしてその雌や子牛を守る為か、まだ年若そうな雄が5頭つづき、その後、最後尾にはおそらく老年だろう体毛が灰色にくすんだ雄や雌たちが6頭少し遅れながら付いて来ている。魔物というものはあまり知恵のない生き物のように思っていたのだが、どうやら間違いのようだ。きちんと守るべきものを選別している陣形を組んでいるのだから。最後尾に行く老いたトータウルは、体の衰えと共に守る側から落ちたわけではない。万が一群れが襲われたときは生贄となり、他の群れのメンバーの生存率を上げる役割をしているのだ。

「あの群れを狙おう。できたら柔らかな肉の子牛を数等仕留めることができるといいが、危険だと判断したら老いたやつらでもいいだろう」

老いたトータウルの肉は筋張っており、肉も痩せて脂分も少なく若い固体と比べてあまり美味しくはないが、危険性から考えると老いたものを狙った方が容易い。一行は静かに群れの風下に移動しつつ、その群れを観察しつつ機会を伺うことにした。狩りは急ぐものではない。まずは計画を立てるところからだ。

第二十四話 巨大な魔物トータウル（後書き）

誤字脱字、おかしい表現など気づかれた方はご連絡いただけるとうれしいです。

これからもどうぞよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9776d/>

メイの冒険

2010年10月9日11時41分発行